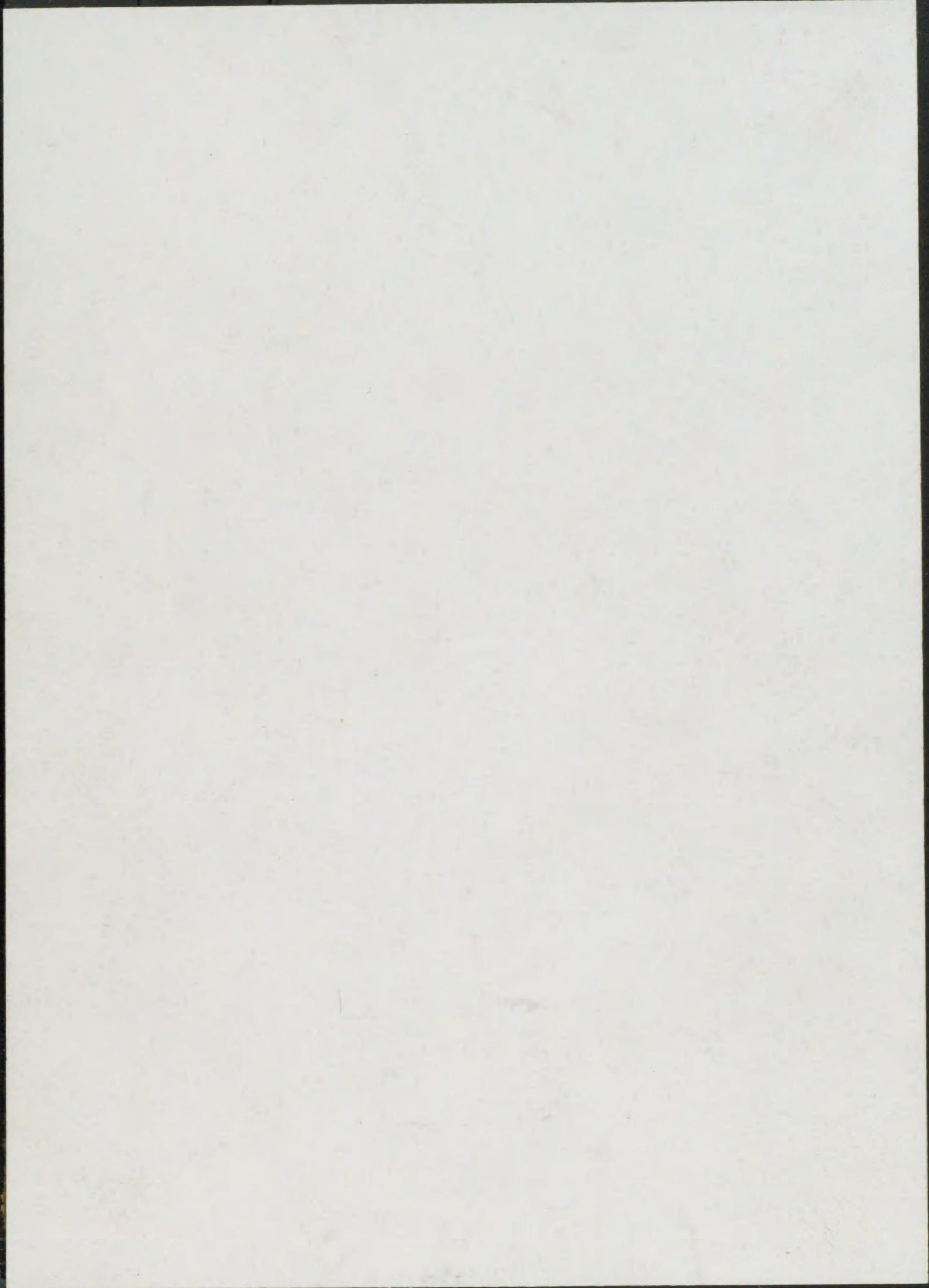
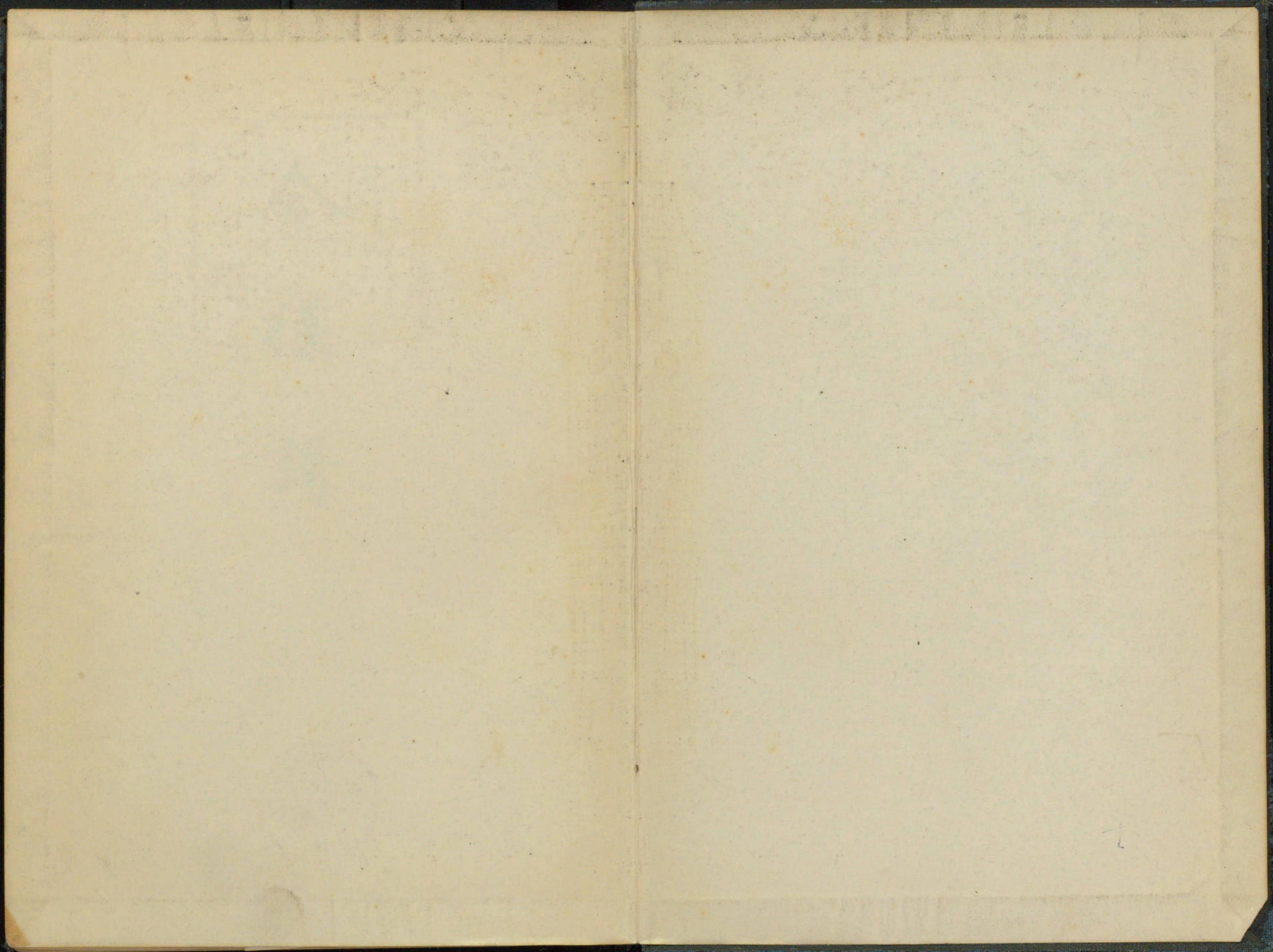


725  
100

725-100  
  
1200501588177







詞



725  
100

今  
様  
歌

序

本年の二月から十月まで九箇月の間に今様歌五冊を上梓した。元來  
限定版である上に其内の百二三十部を一般に配分したまでである  
から門人といへども大部分は配分にあづかる事が出来ず地方によ  
つては次から次へと傳寫して居るさうであるが、かくては定めて三  
冢の誤が出来たる事であらう、否多くの地方では傳寫の便も得ないで  
あらうから何とかせねばなるまいと思つてゐた折から此書の印刷  
を托した福壽堂の主人石野觀山君が來て

此御本は我々が拜見しても面白うございますから見たいと思ふ者は御門人ばかりではございますまい。もし公刊を御許し下さいますならば天下の人と共に喜を分かたうございますと云ふから「それもよからう」と答へたのが此書が流布せらるるに至つた因縁である

昭和十一年十一月五日

南天莊主人

目次

第一集

緒言	一
目次	八
本文	一一
作后感想	四二
附レコード盤解説	四七
第二集	
緒言	五一
目次	五五
本文	五九

第三集

緒言 ..... 一〇七

目次 ..... 一一五

本文 ..... 一一九

第四集

緒言 ..... 一六九

目次 ..... 一七七

本文 ..... 一八一

第五集

緒言 ..... 二二三

目次 ..... 二三二

本文 ..... 二三五

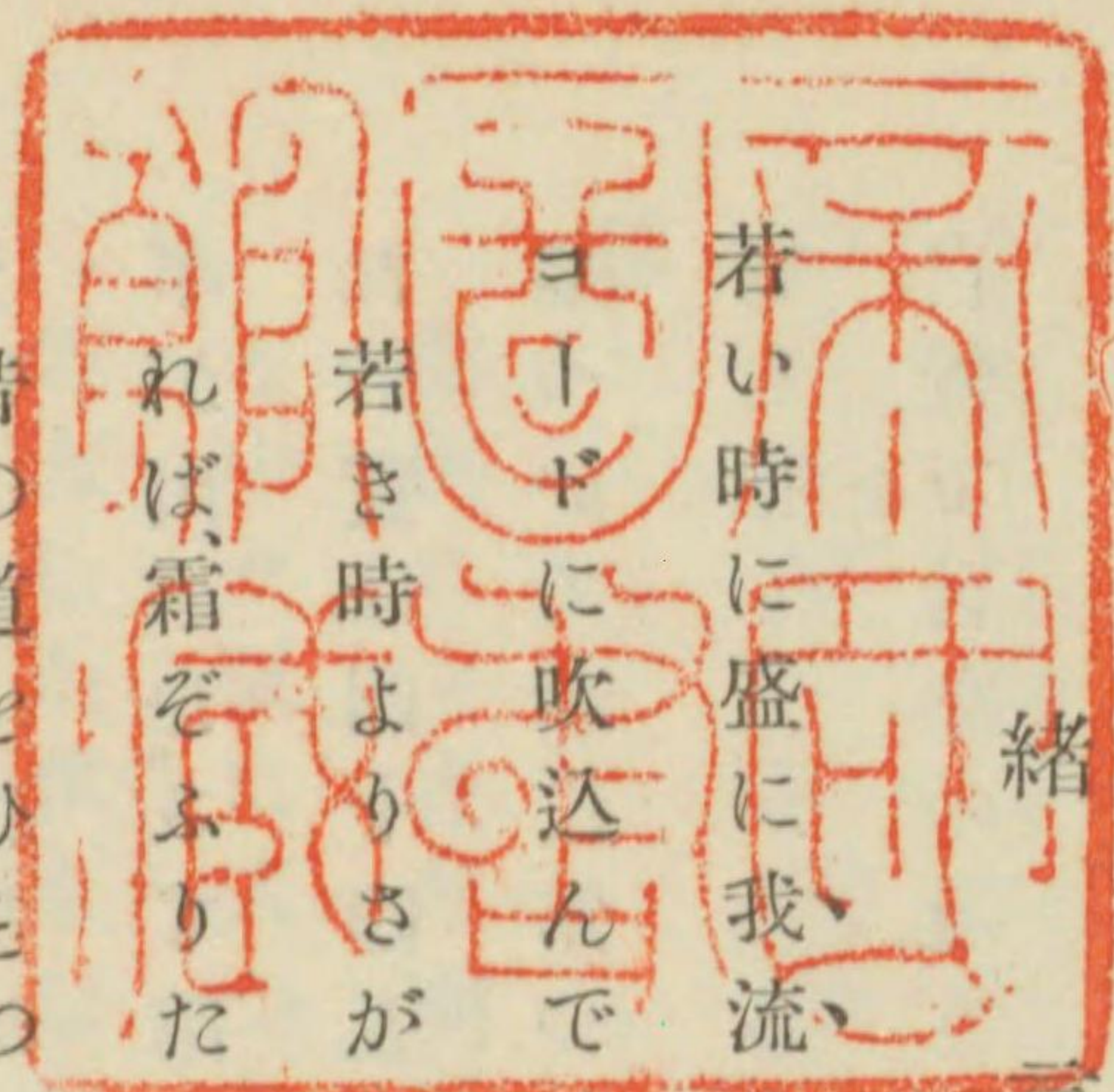
索引

題索引 ..... 一

註索引 ..... 九

今様歌

第一集



緒言

若い時に盛に我流の今様を歌うた。それを  
中川が覚えてゐて頻にレ  
コードに吹込んでくれと云うた。そこで

若き時よりさがなくて、あそびくらしつ春秋を、こころの鏡けさ見  
れば霜をふりたる頭にも

昔の道をひとつだに、きはめまほしと思へども、いかにかもせむ半

にて、日は傾きぬ山のはに

といふ二篇の歌を作つて昭和十年七月十日にレコードに吹込んだ。

吹込といふものはどうしてするものとも更に知らなかつた上に室の廣さ受聲器の高さなど勝手のわるい事が多かつたから平生のやうには歌はれなかつたが、それでも井上流の歌ひ方の節だけは残す事が出来た。さて第一篇の方は當時面倒だつたから舊作としておいたが實は四十四五歳の頃即萬葉集新考著作に著手した頃の感想に基づいて新に作つたのである。サガナクテといふ辭に就いて往々不審を抱く人があるが余は壯年時代まではなまけ者の大酒飲の武勇自慢で言葉の通りの不良であつた。ただ卑怯な事をしなかつただけである。余が世間並の人間になつたのは老境に入らんとしてからである。さて右のレコード盤は蓄音器時代に二百枚だけ作製して門人知人に分與する事を許した。その分與を受けた人々の中に此盤を

便として朗吟を練習して居るものがある。と聞いたが京都の門人たちは最熱心で本年十月の始に天橋立に遊んだ時に人々の歌ふのを聞いたが、はや相當の處まで到つて居た。其時人々の云ふには唯二篇だけでは物足らぬ上に先生の御感想を代つて歌ふやうな氣がするから古來の今様歌の中から若干選出してほしいとの事であつた。余は

如何にも尤な頼ではあるが萬人の作る歌でさへ之を擇ぶとなると中々氣に入つたものは無いものである。まして今様の如く一部の人しか作らなかつたものの中からよい物を擇ぶと云ふ事はむつかしい事である。現に自分の暗誦して居る十數篇の中でもよい物はただ一篇で、それもテニヲハに誤があるから直して歌はねば



ならぬ。ヨシそれならば氣の向いた時に自分が作つてあげよう  
と答へた。然し余は今様を作るに經驗があるのではない。二十二三歳  
の時に故森林太郎君に勧められて獨逸人の一小詩を

わが上にしもあらなくに、などかくおつる涙ぞもふみしだかれし

花さうび、世はなれのみうき世かは

といふ今様に譯して國民之友夏期附録のおもかげの中に出したが  
余の經驗はこれと、先頃吹込の料として作つた二篇とのみである。さ  
て歸京後に枕上や散歩中に作つて見たが極めてたやすいもので大  
抵三四分間で出来る。否僅に一分間で出来たものもある。然し二三度  
歌うて見て歌ひにくい處を直さねばならぬから其點が短歌を作る  
より煩はしい。さて十月三十日に天橋立を作つたのを始とし十一月

二十七日に千代、古道と高雄とを作つたのを終として約一箇月に三  
十六篇を作つた。其内若干を二三者に漏した所がいづれも大に興じ  
た中に外山遠藤の二人が我々の手で一冊子として親しい人々に配  
りたいから是非原稿を作つてくれと云うた。そこで右三十六篇の中  
から橋立のきれ戸真間の手兒名丹波の出雲神社石清水八幡淀の五  
篇を削つて三十一篇三十二章として渡したのが此冊子の原稿であ  
る。自分では興味が盡きたから爾來一週間には唯一篇しか作らぬが、  
又氣が向いて作るやうになつて又篇の數が積つたら或は第二集と  
して發表するかも知れぬ。元來今様歌作製は余の本領で無く又余に  
は彼の不良時代の氣まぐれといふものが残つて居るから未來の事  
は余自身にも分らぬ。云ひ忘れたが此三十一篇の歌の題目が悉く京

都附近の名所であるのは、もと京都の人たちの頼によつて作つたものである上に余の遊覧したのは天の下で京都附近が最多いからである

昭和十年十二月五日

南天莊主人

附記

初から一篇を一頁に印刷する積りで餘白が十分にある事であるから成るべく多く註を付けていただいたが、なほ追加したい處があつたから我々の手で補註した。無論一々先生の許可と校閲とを受けた。左註の中で○は先生の御自註△は我々の補註である歌の順序は御作製順になつて居る。即先生から下げられた原稿のまままで我々は妄に編次する事はしなかつた  
削除せられた五篇もよい機會に御發表を願ふ積りである  
卷末に中川恭次郎翁が書かれて彼分與レコード盤に添へられた解説を載せておく

外山且正  
遠藤二郎 謹記

目次

天橋立 ..... 一頁

瓢を贈られて ..... 一二

共によし ..... 一三

枚方<sup>ヒラカタ</sup> ..... 一四

保津川<sup>ホヅ</sup> ..... 一五

清瀧川 ..... 一六

筑扶島 ..... 一七

鞍馬山 ..... 一八

鞍馬道 ..... 一九

詩仙堂 ..... 二〇

貴布禰 ..... 二二

大原 ..... 二二

龍華越<sup>リユヅク</sup> ..... 二三

還來神社<sup>モトヨキ</sup> ..... 二四

藤樹書院 ..... 二五

阿渡川 ..... 二六

笠置山 ..... 二七

又 ..... 二八

小澤蘆庵墓 ..... 二九

小澤蘆庵 ..... 三〇

神光院 ..... 三一

又 ..... 三二

一休禪師……………三三三

佐河田昌俊墓……………三四

龍安寺……………三五

能因法師墓……………三六

櫻井……………三七

千代のふる道……………三八

高雄……………三九

四明嶽シキヤク二章……………四〇

天王山……………四一

以上三十一篇三十二章……………

天橋立

月にきらめくよさの海やす昌あその妬きかな、松の影をやかぞへけむ、歌よむ妻の手をとりて

○一時藤原(平井)保昌丹後守タリキ。あそハ朝臣ノ古語ナリ。丹後ノ國府コフハ橋立ノ北方、ツノ根ニ當ル處ニ在リキ。保昌ノ妻ハ即和泉式部ナリ

山田壽房君より瓢を贈られて

人のなさけもくみ入れて、たづさへそめつ野あるきに、よき名えらびてつけしかど、酔のまぎれに忘れけり

○初、野ありきにトセシカドリきにト同韻三ツ續キテ謠フニ宜シカラザレバ野あるきにト改メタルナリ。萬葉集ニ阿留伎・安流久・安流氣騰トアレバあるくガ新シキニハアラザルナリ

共によし

あふみの海もわすられず、天のはしだてはたをかし、いづれかよきと人とはば、ともによしとぞ答へてむ

△琵琶湖ニ巡遊セラレシハ昭和四年六月、天橋立ヲ遊覽セラレシハ本年十月ニテ隨行者ハ略同一ナリト云フ

枚方

みな底にほふよど川の、堤にたちて見わたせば、つちより昇るう  
す霧に、沈む夕日ぞめざましき

△枚方ハ淀川ノ左岸ニテ大阪ヨリ京都ニ到ル国道ニ當レリ

保津川

上ゆく汽車ぞやすからむ、竿にひまなしふな人は、さつきのつ  
じ若みどり、ああとめでむもこころなや

△保津川ハ急流ニシテ岩多シ。山陰本線ツノ右岸ニ沿ヘリ。杜鵑花ハ此川ノ名物ナリ。岩間  
ニ生ヒテ皆長低シトイフ

清瀧川

きよたき川のおち合の、さざれにまじるかはらけは、うつくし人や高雄にて、肱もあらはに投げてけむ

△清瀧川ハ保津川ノ支源ナリ。高雄愛宕ナドノ麓ヲ流レテ保津川ニ注ゲリ。土器ヲ谷底ニ投ゲテ遊ブコト高雄ニテ行ハル

筑扶島

今津あたりに家もがな、波のうへゆく鞆もがも、風月きよきよひよひに、來ても遊ばむちくぶ島

○竹生ト書クハ陋シ。筑夫（扶桑略記元慶三年三月）筑扶（日本紀略昌泰三年十月）ナド書クベシ。がなトがもトハ辭ヲ更ヘタルノミ。本來同義ナリ。但ココニテハ置換フベカラズ。家もがなハ調子ヲ上グル處ナレバ第一段ノなヲ用ヒ杳もがもハ下グル處ナレバ第五段ノもヲ使ヒタルナリ。風月ハ音讀スベシ。但萬葉集卷八及卷十九ノ風雲ノ例ニ倣ヒテ訓讀セムモ不可ナラズ

△今津町ハ近江國高島郡ノ一邑ニテ琵琶湖ノ西岸ニ臨メリ。筑扶島ヨリ水上凡三里ナリトイフ

鞍馬山

木の根ことごとあらはれて、網をぞ張れる山の背に、何をか取る  
とあざければ、たちまち足を取られけり

△鞍馬山ノ背面ノ樹根網ハ壯觀ナリ。山ヲ下レバ貴布禰ナリ。谿水兩山ノ間ヲ流ル

鞍馬道

北につらなるやまやまを、あふぎつつゆくくらま道、たひらの宮  
のみや人の、よめる時雨をけふぞ見し

△東京ハ山遠ケレバ平安朝時代ノ歌ニ見エタル如キ時雨ノ景趣ハ見ラレズ



詩仙堂

ますらたけをの骨くちて、尼のまもれるしせん堂、はひりのおち  
葉掃ふとも、いつ葉なな葉は残さなむ

△ますらたけをハ無論石川丈山ナリ。尼僧ノ細心ヨリアマリニ掃除ノ行届キタルヲ卻リテア  
カズ思ハレタルナラム

貴布禰

きぶねのやしろのおくつ宮、小鳥もなかぬものぶかさ、苔ふむお  
とに見かへれば、片荷になへるたには人

○貴船ト書クハ快カラズ。日本紀略・神名帳ナドノ如ク貴布禰ト書クガヨシ。今様歌ノ七言  
句ハ辭ニヨリテハ八言トナルヲ嫌ハズ

△貴布禰神社ノ奥宮ハ口宮ヨリ四五町許ノ川上ニ在リ。其奥ハ即丹波トノ國界ナル芹生峠ナ  
リ

大原

おぼろのしみづあせたれど、もとのこころはくまれけり、みやこ  
がへりのから馬に、おとうと載せてゆくをとめ

○古今集雜上ニいにしへの野中のしみづぬるけれどもとの心をしる人ぞくむトイフ歌アリ。  
又大原やおぼろのしみづトヨメル歌後拾遺集以下ニ多シ

龍華越リユウゲ

むかしながらの道ありて、近江へいづるとち生ごえ、つかさにた  
ちて見さくれば、さざなみにほふ和邇の海

○大原ノ奥ヨリ近江國和邇ニ出ヅル山路ヲ途中越又ハ龍華越トイフ。途中ハ栃生ノ訛ナリ。  
昔ヨリ開ケタル道ニテ一時關ヲ置カレシ事アリ

△近江ヘトイヒ近江國和邇ニトイヒテヘトトヲ使分ケラレタルニ注意スベシ

還來神社

かかるところにかかる神、ましまさむとは知らざりき、げに家びとはあさゆふには、やもどりこと祈るらむ

○山路ノ近江ニ入りタル處ニ壯麗ナル社アリ。還來ト書キテもどろぎトヨマセタリ。もどろぎハもどりこ又ハもどりきノ訛ナルベシ。社ニハ淳和天皇ノ御母藤原旅子命ナイハヘリ

藤樹書院

小川の里に来てみれば、ふみ屋たふとし墓もまた、まるらずなりき社には、靈まさじかとうたがひて

○書院ノ北方同側ニ墓所アリ。其對側ニ近年建築ノ神社アリ。藤樹先生ハ謙讓ナル人ナレバ恐ラクハ神殿ニハ安ンゼザラム

阿渡川

あどの川門を來て見れば、おもひの外にひろきかな、柳はいまも  
おひたれど、名をば賣らむとせざりけり

○大溝町ト今津町トノ中間ニ安曇川ノ鐵橋アリ。所謂あどのみなと即川口ヨリハ一里許モ上  
ナルベシ。小川ノ北方ニ當リタレド小川ヲ貫ケルハ里道ナリ。あど川又ハあどのみなとヲヨ  
メル歌ハ萬葉集ニ五首アリ。就中卷七ニあられふりとほつあふみのあど川やなぎ、かりつれ  
どまたもおふちふあど川やなぎトイフ旋頭歌アリ。とほつあふみハ奥近江トイフ事ナリ。柳  
はノ上ニ萬葉集に見えたるトイフ事ヲ補ヒテ聞クベシ。初、名を賣らむとはトセシカド謠ヒ  
ニクキニ由リテ改メツ

△前篇ニに來てみればトイヒ本篇ニを來て見ればト云ハレタルニ注意スベシ

笠置山

かさぎの山のやま口に、關をまうけて人とめて、ひとりびとりに  
問ひてまし、むかしの事を知れりやと

△畏多キ史蹟ガ尋常ノ遊覽地トナラムトセルヲ嘆カレタルナラム

又

かさぎの山のゆるぎ石、御目にもけだしふれにけむ、ゆるぎし御世はありけれど、おちしためしはなかりけり

○けだしハ或はナリ。ゆるぎしノ上ニ此岩のやうにトイフコト、おちしノ上ニ此岩と共にトイフコトヲ補ヒテ聞クベシ

小澤 蘆庵墓

北しら川のはかどころ、人のかきつに入りたれど、たれどにあらず入りたれば、なかなか長くつたはらむ

○蘆庵ヲ葬リシ心性寺ハ明治ノ初廢絶シソノ址ハ今北白川池田町ナル島津氏ノ別荘内ニ入レリ。墓ハ別荘内北端ノ丘ノ中腹、松樹ト門人田山敬儀ノ墓トノ間ニ在リテ南面セリ

小澤蘆庵

親のためなるしら波と、聞くより繩をときすてて、きぬと米ヨネとを  
取らせきと、かたならば人や信じなむ

○蘆庵ハモト劍客ナリキ。年老イテノ後盜人其庵ニ入ラムトセシニ蘆庵常ニ薙刀ヲ把リテ之  
ヲ拒ギ盜人ノ遂ニ得入ラザルヲ見テありそ海のいはほこごしみこえかねてよるよるかへる沖  
つしら波トイフ歌ヲヨミキトイフ。今ハソレヲ種トシテ作り出デタル浪語ミナトコトナリ。但ヨク蘆庵  
ノ性格ト生活トヲ知レル人ハ浪語中ニ眞アルコトヲ認メム

△以上二篇ハ半眠半覺中ノ作ナリトイフ。用語思想ノ奔放自由ナルハソレガ爲ナラム

神光院

茶所チャジョ 茶所チャジョ となれる石ぶみを、よみつつをれば見つけてや、徳たかげ  
なる上人の、草ぐつふみて來たまひし

○神光院ジシクワウハ西賀茂ニアル大寺ナリ。茶所ハ門内ノ左側ニ在リ。參詣人ノ茶吞所ナリ。蓮月尼  
晩年此茶所ノ奥ノ間ニ住ミタリキ。尼ノ碑ハ茶所ノ側ニ在リ(墓ハ同村小谷墓地ニ)。此處ニ  
來リシハ昭和六年十月ナルガ其時住職一水和尚ヨリ唯二葉アル拓本ノ一ヲ贈ラレキ

又

きよき大にはかこみたる、低きついちの上こして、つらなる山のみゆるかな、尼のすまひしあたりより

○大庭八門内ナリ

一休禪師

君のころは君ぞしる、雲と水とはあひ知らじ、同じくたふとき胤ながら、無文はましきおく山に

○昭和五年一月南山城田邊町薪ノ酬恩庵ニ遊ビシ時ノ感想ナリ。一休禪師ノ骨塔此寺ニアリ。禪師ハ後小松天皇ノ皇子ナリ。對照シタル無文禪師ハ後醍醐天皇ノ皇子ナルガ遠江國引佐郡奥山ニ方廣寺ヲ開キテ其處ニテ寂セラレキ。奥山ハ地名ナレド深山ノ如ク聞ユルヲ利用シタルナリ

佐河田昌俊墓

三四

こころにかかる國のさまあそびにのみや耽るべきいざ見よこ  
れは槍きずをもたりし人の石ぶみぞ

○同ジ寺ニテ偶然ニ佐河田昌俊ノ豊碑ヲ見キ。後ニ又偶然ニ其碑ノ拓本ヲ獲キ。昌俊ノ風流  
生活ハ病ノ爲ニ隠居セシ後ノ事ナリ。元來所謂武邊ヲ以テ聞エシ人ナルガ、タマタマ其作ナ  
ルよしの山花さくころはあさなあさな心にかかる、峯のしら雲トイフ歌ガ後陽成天皇ノ勅感ヲ  
蒙リシ爲ニ武邊者ノ名ガ歌人ノ名ニ蔽ハレシナリ

龍安寺



十しろに足らぬつば庭の、ただ大うみと見ゆるかな、木を添へざ  
りき相阿彌は、草おほさぬは世世のぬし

○寺ハ右京區花園ニ、衣笠山ノ南ニアリ。相阿彌ノ作レル庭アリ。大小十餘箇ノ石ヲ五箇處ニ  
寄セ集メテ島メク物ヲ作レリ。低キ築土ニ圍マレタル砂庭ナルガ一木一草モ無シ。古來コノ  
一木一草モ無キ事ヲ相阿彌ノ意匠ニ歸スレド草ヲハヤサヌハ代々ノ住持ノ注意ト認ムベシ。  
十代ハ二畝ナリ。此歌ハ相阿彌ニ韻頑セムトニハアラネドワザト石ノ事ヲ云ハザルナリ



能因法師墓

人におくりし鉋カネくづは、ゆくへしられずなりにけむ、かはづに似たる石ひとつ塚のもとにて我はえき

○墓ハ攝津國三島郡磐手村古會部コウベニアリ。木深キ長塚ニ石ノ玉垣ヲ周ラセリ。余偶然ニ其塚ノ下ニテ一石、蛙ニ以タルヲ拾ヒテ今モ文庫ニ藏メタリ。能因ハ好事者ニテ會テ節信トキノシトイフ者ト始メテ逢ヒシ時此ヨリ長柄橋ノ鉋屑ヲ贈リシニ彼ヨリ井手ノ蛙ノカレタルヲ贈ラレシ事アリ。此事袋草紙ニ見エタリ。かなハ今イフかなナリ。萬葉集ニモま鉋カネもちゆけの河原の  
マタわれは家思ふいほり鉋カネしみト書ケリ

櫻井

乃木大將のふでのあと、きざめる石を建てし時、みたと川より河内より、見に来て御靈ミタマぞつどひけむ

△櫻井ハ今ノ攝津國三島郡島本村ノ大字ニテ所謂子ワカレノ跡ハ西國街道ニ沿ヘリ。正面に楠公父子訣別之所ト刻メル高サ一丈五尺ノ碑ヲ建テタリ。字ハ乃木大將ノ絶筆ナリトイフ。  
建碑ハ大正三年七月ナリ

千代の古道

三八

ちよのふる道よるゆけば、蟲のねすなりほのかにも、車とどめて  
火をけてば、つちをとよもす秋の樂

○後撰集雜上ニ仁和の帝、嵯峨の御時の例にて芹川に行幸し給ひける時在原行平朝臣「さが  
の山みゆきたえにし芹川のちよのふる道跡はありけり」トアリテ千代ノ古道ハコレヨリ名所  
トナレリ。但ソノ處サダカナラズ。余ガ蟲聲ヲ聽キシハ廣澤池附近ノ林間ナリ  
△とよもすノとハ濁ルベカラズ

高雄

もみぢの陰のにぎはしさ、ツチ地にもあかし茶屋のチカ氈、うしろの墓を  
とぶらへば、櫃のはやしに鳥ぞ啼く

△うしろの墓トイハレタルハ和氣清麻呂公ノ墳ナリ。護王神社ハモト此處ニアリシナリ

四明嶽<sup>シミヤウダケ</sup>

四〇

かごにめせとや山かごは、たをやめたちの乗るものぞ、われはま  
すらをかごかきの、肩しいたまば代りてむ  
さてこころみにのりみれば、おもひの外にここちよし、我はかく  
てぞいだきへ、かちにて登れたをやめは

○以下二篇三章ハ謡ハレズ。直サムカ省カムト迷ヒシガ思フ所アリテサナガラニ存ジツ。七  
五調ノ文辭ト見ムモ可、無曲ノ朗吟ニ供セムモ可ナリ

天王山

寶でらには縁とほし、目ざすは峯のはかどころ、時をともしみ路  
ふまず、空かけり來つ風のごと

○萬葉集卷十四ニしもつけぬあそのかはらゆいしふまずそらの登<sup>ツ</sup>きぬよながこころのれトイ  
フ歌アリ。此處ニ遊ビシハ昭和二年一月六十二歳ノ時ナリ。山腹ノ寶寺ニテ聞クニ普通往復  
一時間ヲ要スレバ頂上ノ眞木和泉等十七士ノ墓マデ登レバ發車ノ間ニ合ハズト云フ。迂曲セ  
ル山路ニ由ラバゲニ間ニ合ハジト思ヒシカバ峯ヲ仰ギテ直ニ登リシニ登二十分、眺望五分、  
降十分ニテ優ニ發車ノ間ニ合ヒキ。爾來僅ニ九年、嗚呼我老イヌルカナ

(昭和十年十一月二十七日整理)

## 作後感想

外山・中川・遠藤の三人又玉川の學園で門人外の一人によりよりに語つた事を其人々の望に依つて集録したのである

今様歌は作つて見ると思の外にたやすいものであつた。顧みて思ふに余は天性揮毫が嫌で短冊だけは已む無く書いたが御歌所出仕以後も久しく色紙に書いた事が無かつた。然るに或時畏きあたりの仰で又已む無く色紙に書いたが思の外に短冊より樂であつた。今様を作つて見た時の心もち色紙に歌を書いて見た時の心持と同様であつた

今様歌は用語思想共に短歌より自由である。然し生硬な漢語卑陋な俗語を使つてはならず又思想の奔放も或範圍を越えてはならぬ事は勿論である  
テニヲハは嚴重に正格に従うた。これを外すと高尚性が減ずるからである

余は平素歌集よりは寧詩集の方を多く讀むが、その絶句の作法のよく頭にはひつてゐた事が大に今様歌を作る助になつた事を自覺した。今様歌にも自然に起承轉結がある。たとへば

起　かさぎのやまのゆるぎいし

承　御目にもけだしふれにけむ

轉　ゆるぎし御世はありけれど

結　おちしためしはなかりけり

かくの如くである。無論わざと起承轉結の格に叶へんとしたのでは無い。三十一篇の中で神光院の

きよき大庭かこみたる、低きついでの上こして、つらなる山の見ゆるかな、尼のすまひしあたりより

こればかりは右の格にかなはず初三句が一續になつて居るが、これは所謂變格で例に引くは不倫であるが李白のかの

越王勾踐破吳歸、義士還家盡錦衣、宮女如花滿春殿、只今惟有鷓鴣飛  
と同格である

七言句を歌ふに韻を重ねる所があるから、たとひ七言が八言となつてもその剰言が恰韻を重ねる處に當るならば少しも障が無い。然したとへばムカシノ道ヲヒトツダニのムカシをイニシへに更へる事

は出來ぬ

短歌の五七が雅調で今様歌の七五が俗調である事はよく心得てゐたが曾遊の紀伊の潮シホの岬那智の瀧など又上賀茂下鴨兩神社などの今様歌を作つて見ようと思つたが、どうしても作られぬ。所詮今様歌の七五調は雄大なるものや森嚴なるものには適當せぬ。今様歌が平安朝の中期に至つて始めて起つたのは當然である。寧大髻長刀の勤王武士などの歌うたのが不思議である

三十一篇の一部分を門人非門人十數人に示したが皆面白いと云うた。中には膝を拍つたものがある。歌うて聞かせられたものの中には涙を浮べたものもある。思ふに短歌より今様歌の方が一層人を感ぜしめるのは楷書より草書の方が面白いのと同じ事であらう。抑古人

先輩の歌を面白いと感ずるのはやがて自作向上の階梯である。多数の門人中從來余の短歌を見てさまで興味を起さなかつたものが若今様歌を見て共鳴する事があるならば必然得る所があるであらう。是此冊子を印行する事を強ひて拒ばぬ所以である

昭和十年十二月八日

南 天 莊

### 附 レコード盤解説

今様は古雅なるものでは無いが、近古の國學者歌人中筑前の二川相スミ近長州の近藤芳樹常州笠間の加藤櫻老など、又かの平野國臣の如きも好みて之を作り又之を歌うたといふ。蓋學事の勞を慰め又は憂國の情を遣るが爲であつたらう。今より五十年許前、長州の一學生落合氏近藤芳樹の傳を得て之を其同學の和辻春次氏後の京都醫科大學教授醫學博士に教へ、和辻氏は之を學び得て晝は茶碗の縁を打ち夜は木枕を叩いて盛んに歌はれしを、我南天莊先生、和辻氏の後輩として聞覺に學ばれたが、元來一絃琴又は二絃琴に合せて歌ふ事なるに、絃なくして素歌ひに歌うては少し間の抜けた感じがあつたから、聊

節を變へられた。されば先生も「オレの今様はホン物ぢや無い。井上流の今様ぢや」と云うて居られた。さて先生は四十歳位までは屢之を歌はれた。小生は先生の二十八歳の時までお側に居つたから亦好んで歌うた。一昨年話のついでに此事を申出でた所が「久しぶりだが一つ歌つて見ようか」と云はれて歌はれたのを承ると、先生は「齒が澤山抜けたから聲がもれる」と云はれるが、音吐朗々として四十餘年前に承つたのと殆かはらぬ。ただ甲乙、甲乙と四節にうたふその甲の節が、息が續かぬ爲に、二段となるのは致方がない。其後二三の人と申合せて一には先生の聲音を百歳の後までも残す爲、二には遠國の門人にして未先生の音容に接せざるものに、寫真と併せて面謁の思あらしめん爲に、蓄音器のレコード盤に吹込まれたしと願つたが、容易に許可

せられなかつた。本年に入つて先生も少し御氣が動いたと見えて、舊作今様一篇に新作一篇を加へて南天莊月報に發表せられた。それでもなほ吹込まうとは云はれなかつた。然るに本月に入つて漸く承諾せられ、期日も十日ときまつたが、折悪しく鼻カタール及咽頭カタールに罹つて居られた上に、前日から腸カタールに罹られたから、折角支度はさせて居りますが、斷にまゐりませうかと申上げたら、先になると益々暑くなるであらうから」と云はれて、豫定の時刻に首尾よく吹込を終へられた。これより先に萬葉集の講義も吹込まれたしと願ひしに此方は直に承諾せられて、面白い長歌を一首講じようと云はれたが、何分盤一面の吹込時間は三分二十秒ときまつて居るから、先生には御不満であつたらしいが、短歌にしていただいた。其短歌は同集

卷九に出でたる石河大夫遷任上京時播磨娘子贈歌二首である

昭和十年七月

門人 中川恭次郎謹記

# 今様歌 第二集

## 緒言

外山遠藤二君の厚意で今様歌の刊行が出来たから其内一百十部ばかりを門人・知人・縁故者に贈った。門人への配分は穩當なる標準を立ててそれに據つたが第一次、第二次のものを合せて凡五人に一人の割合となつたであらう。さて挨拶狀が來そろつたから、それを通覽するに中には感謝といふよりは感激したものがある。又感想を書いて來た人があるが其中には作歌上多少自得したナと思はれるものがある。元來どうしたら門人の歌が上達しようかと云ふ事に就いては



始終心を碎いて從來さまざまの方法を講じたが今様歌を作つて見せる事によつて又一つの方法が加はつたやうなここちがする。そこで在京の二三者に向つて「甚しい迷惑でも無いから追々に百五十篇ばかり作つてやらうか」と云つたら、いづれも「さう願へる事ならば」と云つた。そこで又散歩中に作り始めたら、いつか又三十餘篇となつた。又そこでどうして出版するかと云ふ事について相談して居る處へ山田壽房君から手紙が来て「若第二集が出るやうなら京都の門人有志に出版を命ぜられたい」との事であつたから即其望に任せる事にした。

第一集を出した時にどうでもよいとも思うたが若干の註釋を添へた。それが不慮に喝采を得て「第二集の時には成るべく多く註釋を加

へてもらひたい」と云ふのが一般の希望である。そこで其意に副はうとした所が註釋の執筆に意外に時間を要した。それは簡潔にして要領を得るやうにと努めたからである。「中身に三分か五分しかかからなくて入物に一時間もかかつてはナア」と嘆息して筆を措かうとしたが或者が「一同の爲になりませうから」と云ふから、それもさうだと思つて筆を續けた。然しそれ程によく見てくれる者が幾人あらうか。三十四篇中今川氏真までの六篇は昭和十年十二月の作、修學院離宮は十一年一月の作、豊臣秀吉以下は皆本月になつてからの作である。くれぐれも斷つておくが余が今様歌を作つて見せるのは人々が短歌を作るのを助ける爲である。今様歌を作るのを奨励する爲では無い。それを承知の上で今様歌を作つて見ようといふのなら強ひて止

めようとはせぬが更に一つ断つておく事がある。余の試みるのは七五句四節の文藝品である。文藝品で無い七五句四節のものならいくらでも出来合がある

外題の今様歌といふ三字は例の如く工藤壯平君の靈筆である

今様歌をつくるには、そぞろありきのをりぞよき、うたひ見るにも聞くものは、畠におりゐるからすのみ

昭和十一年二月二十二日

南天莊主人

○は原註 △は門人補註

目次

比企谷	.....	神奈川縣鎌倉町	.....	五九	頁
長篠城址	.....	愛知縣南設樂郡	.....	六〇	
桶峽	.....	同	知多郡有松町	.....	六二
同	.....	同	同	.....	六四
同	.....	同	同	.....	六五
今川氏眞	.....	同	同	.....	六六
修學院離宮	.....	同	京都市左京區	.....	六七
豊臣秀吉	.....	同	同	.....	六八
中村	.....	同	名古屋市西區中村町	.....	六八
同	.....	同	同	.....	六九

聚樂址	京都市上京區	七一
大坂城	京都市東山區	七三
阿彌陀峯	京都市東山區	七五
穗井田忠友墓	中京區誓願寺墓地	七六
東福寺	東山區	七八
坂上田村麻呂墓	同 山科	七九
苔寺	同 右京區松尾	八一
岩倉	京都府愛宕郡	八二
老の坂	山城丹波國界	八三
山崎	京都府乙訓郡大山崎村	八五
鷺坂	同 久世郡久津川村	八七
木津川	同 相樂郡	八九

奈良	春日山	九〇
	森の村夫子(三章)	九一
	森ハ奈良縣高市郡越智岡村ノ大字	九二
	昆陽池	九四
	兵庫縣河邊郡稻野村	九五
	白髭神社	九六
	滋賀縣滋賀郡小松村	九七
	藤樹書院	九八
	同 高島郡青柳村上小川	九九
	楠木正成	一〇〇
	千早城址	一〇一
	大阪府南河内郡	一〇二
	同	一〇三
	同	一〇四
	楠木正成銅像	一〇五
	楠木正行	一〇六



長篠城址

とびが巢山の火の手見て、すはとひらきつ大城戸を、たちまち敵の影うせて、ながしの城は日本ばれ

○三河國ノ豊川（吉田川）ノ上流ヲ大野川トイフ。瀧川（一名寒狭川）西北ヨリ來リテ之ニ加ハル。長篠城ハ適ニ二川ノ隅角ニ在リ。家康ノ部將奥平貞昌之ヲ守ル。天正三年武田勝頼甲斐ヨリ發シ信濃ヲ經テ三河ノ東部ニ入り兵ヲ分チテ長篠城ヲ攻メシメ又大野川ノ東即城ノ對岸ナル鳶巢山ナドニ砦ヲ築キテ城ヲ脅サシム。鳶巢ハとびがすナリ。とびのすニアラズ。家康ノ部將酒井忠次夜鳶巢ノ砦ヲ襲ヒテ之ヲ燒ク。城兵其火ヲ見、援軍ノ至レルヲ知り門ヲ開イテ敵ヲ突ク。ソノ前日勝頼ノ本軍ハ瀧川ヲ渡リテ其南方ニ屯セシガ此日信長及家康ト戰ヒテ大ニ敗レ川ヲ越エテ奔リ去ル。長篠城ノ圍始メテ解ク。時ニ五月二十一日ナリ。コレニ由リテ日本ばれト云ヘルナリ。又すはと開きつ大きどをトハ城兵ノ討ツテ

出デシヲ云ヘルナリ

桶ハ峽ハ 其一

豈はからめや桶はさまおもひもかけじ本能寺げにや人間五十年、夢まぼろしのごとくなり

○桶ハザマハ尾張知多郡ノ内ニテ愛知郡界ニ近シ。今ハ有松町ノ大字トナレリ。義元ノ討タレシハ實ハ田樂ハザマ(一名田樂ガ窪)ニテ桶ハザマヨリハ北方ナリ。即桶ハザマ山ノ内ナガラ其北方ナル松原ナリ。畢竟桶ハザマニ廣狹二義アルナリ。サレバ世俗ノ如ク桶ハザマト云ハムモ不可ナラズ。サテ桶峽間ト書ケル間ハ不要ナリ。桶峽ニテヨキナリ。はざまハ谷ナリ。サレバ峽ヲ充テタルナリ。挾間ト書クハ擬字、狹間ト書クハ誤字ナリ。信長ガ心ヲ決シテ夜半ヲ過ギテ清須城ヲ發セムトセシ時謡曲敦盛ノ中ナル人間五十年、けてんの内をくらぶれば、夢まぼろしの如くなりトイフ數句ヲ歌ヒテ舞ヒキトイフ。けてんハ諸書ニ化轉・外典・下天ナド書ケリ。本字ハ樂變化天ラクヘンシツ又ハ化樂天ケラクノ略ナル化天ケテンナラム。此天

ノ一晝夜ハ人間ノ八百歳ナリトイフ。けてんの内をノをハとノ誤カ。くらぶればハ又かぞふればトアリ。義元ノ斃レシハ永祿三年五月十九日ノ午下ナリ。此時義元四十五歳、信長二十七歳ナリ。信長ガ後ニ弒セラレシハ年四十九ノ時ナリ

桶 峽 其二

上の山よりおろし來し、午のさがりのはやさめに、あかぢ錦のひ  
たたれも、むなじろ具足も泥まみれ

○上ハ山ハ後ノ東海道ヲ隔テテ田樂ハ、ハザマノ北ニ在リ。太子ガ、ネトイフ。但記録ニウハハ  
山トモ云ヘリ。信長此山ヨリ馳下リテ直ニ義元ノ旗本ヲ衝キシナリ。赤地ノ錦ノ直垂ト胸  
白ノ具足トハ義元最後ノ服装ナリ。午のさがりハ午後一時頃ナリ。此語安定セザル感アレ  
バ當時ノ暴風雨ヲ特ニはやさめト云ヒテソノはやニテうまヲ繋ギ止メタルナリ

桶 峽 其三

あすは清須に入るべしと、つげぞやりけむ駿河にも、そのおとづ  
れを家人の、ききしきのふや身のをはり

○當時義元愛知郡沓掛ヨリ發シテ知多郡大高ニ到ラムト欲シ其途中田樂ハ、ハザマニ懟ヒシナ  
リ。サテ前鋒ノ捷報頻ニ至リシカバ氣驕リテ用心セズ不覺ニモ置酒遊興シテ「明日ハ清須  
城ニ入ラム」ト豪語シキトイフ。義元ノ本城ハ駿河ノ府中即今ノ静岡ナリ

今川氏眞

かがめやかがめやぶなかへ、きのふもをどりけふもまた踊りつかれて知らぬまに、するがの國はくづれけり

○氏眞ハ義元ノ子ナリ。義元ノウセシ後ノ今川氏ハ武事ヲ<sup>ユルカセ</sup>忽ニシ上下踊ヲ好ミキ。當時「駿河ノ踊小田原ノ酒」ト唱ヘテ心アル者ハ其家ノ爲ニ危ミキト云フ。小田原ハ北條氏ナリ。又滅亡ノ年ニかがめやかがめや、藪のなかへかがめトイフ踊歌行ハレキ。今川氏ノ亡ビシハ永祿十一年ナリ

修學院<sup>シユガクイン</sup>離宮

うるはしけれどををしくて、大きなれどもみやびたり、乞ひてよく見よこの御には、をみな之歌はかくしこそ

○修學院離宮ハ後水尾天皇ノ御經營ナリ。雄大ニシテ然モ典雅ナルガ其特徴ナリ。かくしこそハかくこそよまめトイフ事  
△歌ヲ作ルニ典雅ナラムトスレバ多クハ繊細ニ流レ繊細ナルヲ避ケムトスレバ往々粗笨ニ陷ルヲ誠メラレタルナリトゾ



豊臣秀吉 其一

見どころもなきみなかより、あまたも人のいでしかな、たつてふ  
神の雲をえば、うなぎも空にのぼるべし 中村之一

○秀吉ノ生レシ尾張國愛知郡上中村ハ今名古屋市ニ入リテ其西偏ナリ。加藤清正・小出秀  
政等モ同村ノ人ナリ。秀吉ノ誕生地ハ今ノ常泉寺境内（一説今ノ中村公園）ニテ清正ノ誕  
生地ハ今ノ妙行寺境内ナリトイフ

豊臣秀吉 其二

雲をえざれば龍すらも、池のものなりとこしへに、清正あそも鎌  
をうち、草を刈らまし太閤も 中村之二

○吳ノ周瑜ノ語ニ「蛟龍雲雨ヲ得バ終ニ池中ノ物ニ非ジ」ト云ヘルニ據レルナリ。松永貞  
徳ノ戴恩記ニ秀吉或時施藥院ヤクホシ全宗（施ノ字ハ訓マヌナリ）ニ對シテ「我尾州ノ民間ヨリ出  
タレバ草カルスベハ知リタレドモ筆トル事ハ得シラズ云々」ト語リシ事ヲ載セタリ。清正  
ヲ鍛冶ノ子ト云ヘルハ俗説ナレドモ妄言ニハアラジ。清正ノ父彈正左衛門清忠ハ武士ノ子  
ナレド二歳ニシテ父ヲ喪ヒ母ト供ニ中村ニ徙リ住ミシナレバ長ジテ糊口ノ資ヲ鍛冶職ニゾ  
求メケム。下半ハ「清正朝臣ハ鍛冶、太閤ハ農夫ニテ終リナマシ」ト云ヘルナリ。「清正ノ  
打ツタ鎌デ秀吉ハ草ヲ刈ツタデアラウ」トイフ事ヲホノメカシタルナリ。秀吉ト清正トハ  
母方ノ再從兄弟（一説ニハ又清正ノ父ハ秀吉ノ母ノ從弟）ナリ。サテましトイフテ、ニテハ

ハカカル處ニツカフナリ

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 奉、幸、御、所、等）

豊臣秀吉 其二

豊臣秀吉 其三

神のゆるせる英雄も、老いては凡夫となり、にけり、じゆらくの供<sup>グ</sup>奉<sup>フ</sup>をさかひにて、世すて人ともならませば 聚樂址

○秀吉ハ天正十三年ヨリ京都ニ聚樂城ヲ築キシガ行幸ヲ仰ギ奉ラムト志シテ城内ニ華麗ナル宮殿（儲の御所）ヲ營ミキ。サテ同十六年四月十四日ニ行幸アルベシト定マリシカバ當日參内シ南殿ヨリ扈從シテ行幸セサセ奉リ殘ル所ナク叡慮ヲ慰メ奉リシ後同十八日又供奉シテ還幸セサセ奉リキ。是秀吉一代中最大ノ奉仕ナリ。行幸ノ顛末ハクハシク太閤記卷十一ニ記セリ。同書ニモ「古キ行幸ノタメシナド聞傳フルニ今般ノヤウナル美々布事ハ絶テナカリシトナリ」ト云ヘリ。抑古ノ大内裏ノ址ヲ内野トイフ。千本通即古ノ朱雀大路南北ニ之ヲ貫ケリ。聚樂城ニ取入レシハ其東部即千本通以東ニテ東西四町南北七町ニ互リキトイフ。建築物ハ秀吉ノ在世中ニ壞タレシガ寛永中其址ヲ開キテ民居一百二十町トシ之ヲ聚

樂組ト稱シキ。聚樂城ハ本來邸宅ナレド其外構、城郭式ナレバ聚樂城ト稱セシナリ。ませ  
ばハましせばノ約ナリ。「世捨人トナリナバ凡夫トナルヲ免カレタラムヲ」トイフ意ナリ

豊臣秀吉 其四

百つぎまでもつたへむと、おほさか城はきづきけむ、祖龍のほね  
の朽ちぬまに、敵は覇上にいたりけり 大坂城

○ももつぎハ百代ナリ。祖ハ始、龍ハ人君ノ象ナリ。祖龍ハ秦ノ始皇ノ隱語ナリ。鬼アリ  
テ「明年祖龍死セム」ト云ヒシニ始マレルナリ。史記ニ見エタリ。

因ニ云ハム。始皇、人ノ鬼語ヲ傳フルヲ聞キテ「山鬼固ヨリ一歳ノ事ヲ知ルニ過ギズ」  
（山鬼固不過知一歳事也）ト云ヒキ。今諺ニ來年の事を云ふと鬼が笑ふト云フハ右ノ故事  
ニ基キタルニテ「人が來年ノ事ヲ云ハバ鬼ガ、オレニダツテ來年ノ事ハ分ラヌモノヲト  
云ウテ笑フダラウ」ト云フ意ナラム。知ラズ夙ク云ヘル人アリヤ

秦代ノ畿内ヲ關中ト云フ。今ノ陝西省ノ内ナリ。四境ニ關ヲ設ケタリキ。漢ノ高祖ノ入リ  
シハ南方ナル武關ナリ。ココヨリ霸上ニ到リシナリ（項羽ノ後レテ入リシハ東方ナル函谷

關ニテ、進ンデ鴻門ニ到リシナリ。即史記ニ「子嬰秦王タルコト四十六日、楚ノ將沛公  
（○即後ノ漢高祖）秦軍ヲ破リテ武關ヲ入り遂ニ霸上ニ至ル」ト云ヘリ。霸上ハ關中ノ地名  
ニシテ首都咸陽ニ近シ。是ニ至リテ秦ハ亡ビシナリ

豊臣秀吉 其五

あみだが峯のうへよりは、津の國までも見ゆといふ、大坂城のや  
けし時、さこそ拳をにぎりけめ 阿彌陀峯

○阿彌陀峯ハ東山ノ一峯ナリ。高サ海拔六百八十尺、頂上ニ秀吉ヲ葬レリ。墓ハ久シク荒  
廢シタリシヲ明治三十一年三百年祭ノ時豊公會が大改修ヲ加ヘテ今ノ如ク壯麗ナルモノト  
ナレルナリ



穂井田忠友墓

阿伽をたむくるまめ人の、すくなき程もしられけり、かしのおち  
葉はしづむとも、沈む世あらじならの葉は

○忠友ノ墓ハ淨土宗西山派總本山ナル京都誓願寺ノ墓地ニアリ。岡山ニ在任セシ時始メテ  
之ヲ弔ヒシニ當時不思議ナル事アリキ。此人ノ作ニテ人口ニ膾炙セルハ汲む人の少き程も  
知られけり、かしの葉しづむ山の井の水トイフ歌ナリ。右ノ今様歌ハ此歌ニ基ヅケルナリ。  
忠友ハ元來奈良朝時代史ノ研究家ニテ其著ニ觀古雜帖・埋麝發香等アリ。今モ史家・考古  
學者ノ珍重スル物ナリ。ならの葉ハならのおち葉ト云フベキヲ上ナルかしのおち葉ニ讓レ  
ルニテ適ニ右ノ著書ヲ指セルナリ。此人ノ事ハ南天莊墨寶解説九十三頁以下ニ見エタリ。  
因ニ云ハム。森銑三君ノ報告ニ據レバ墨寶ニ出セル余ノ所藏ノ畫像ハ帝國圖書館所藏栗原  
信充稿本肖像集ニ出デタリトイフ。又墨寶解説九十二頁ニ忌日ヲ十五日トセルハ十九日ノ

誤植ナリ。昭和七年十月ニ再其墓ヲ弔ヒシニ碑石傾キ又碑前ノ中央ニ花立ノ竹筒一本ヲ立  
テタリ。花筒唯一本ナルハ無縁ノ微ニテ若干年ノ後ニ墓石ノ撤卻セララルル恐アリト聞キシ  
カバ金一封ヲ寺ニ納メテ撤卻ノ期ヲ延ベシメキ。まめ人ハ志篤キ人ナリ

東福寺

聖シヤウイチ一國師テウ兆デン殿司、通天橋ケウを知れるのみ、その外の名はしらねども、もみぢは見えきくれなるに

○東福寺ハ禪宗ニテ五山ノ一ナリ。聖一國師即圓爾和尚ハ此寺ノ開山ナリ。兆殿司即僧明兆テウハ此寺ノ役僧ニテ畫ニ巧ナリキ。通天橋ハ寺中ニアリ。屋アル橋ニテ高ク澗上ニ懸リタレド寧陸橋ト認ムベシ。槭樹カヘデハ特ニ澗邊ニ多シ。結句ハ「綠ニモ見エナカツタ」ト云ヘルナリ。所謂直指人心ノ意ナリ

坂上田村麻呂墓

弓矢のいさをにむくいむの、大御こころぞかしこきや、くるすの墓のゆる由をしれりや今のいくさ人

○俗ニイフ田村將軍ナリ。大日本史卷一二二(列傳)ニ諸書ヨリ採集シテ

弘仁二年粟田ノ別業ニ薨ズ。年五十四。、、山城宇治郡栗栖村ノ水陸田山林三町ヲ賜

ヒテ墓地トシ其屍ヲ棺中ニ立チ平安城ニ向ハシメテ之ヲ葬リ甲冑劍矛弓箭繡鹽ヲ并セテ之ヲ瘞ム。、、ソノ佩ビタリシ劍ハ之ヲ御府ニ藏シテ坂上ノ寶劍ト曰フ。帝ミヅカラ

其像ニ贊シテ深ク哀惜ス

ト云ヘリ。武臣ノ光榮極レリト謂フベシ。墓ノ所在ハ宇治郡山科村大字栗栖野(今ハ京都市東山區ノ内)ニテ勸修寺クワンシユジノ北方ナリ。栗栖野ハ今くりす野ト唱フレド本來くるす野ナリ。此墓ヲ俗ニうまのせト呼ブ。夙ハヤク田邑麻呂傳記ニ今俗呼爲ニ馬背坂ト註セリ。サレバうま

のせハ元來地名ナリ。明治二十八年平安遷都一千百年祭ノ時修治ヲ加ヘシカバ今ハ再堂々タル墓トナレリ。かしこきやノやハ疑辭ニアラデ結ノ下ニ添フル嘆辭ナリ。源氏物語夕顔ノおほしやる方ぞなきやナドノ同例ナリ。短歌ニハ例ナキ如シ

苔 寺

世にたたふるは苔なれど、こけは自然ジネンに生ふるもの、うしろの岡のには石の、くばりざまこそえもいはね

○苔寺ハ西芳寺ノ俗稱、西芳寺ハ天龍寺派ノ一禪刹ニテ京都西山ノ内モトノ葛野郡松尾カノノマツノニアリ。當寺ノ林泉ハ中興開山夢窓國師疎石ノ作ナリ。うしろの岡のには石ト云ヘルハモトノ指東庵（即今ノ開山堂）ノ立石置石ナリ

△えもいはずトハ言語ニ絶シタリト云フ事、くばりざまハ排置ナリ

## 岩倉

北いはくらのかくれがを、くびなぞたたく太刀はきて、きき耳たつるつかささへ、あやしまざりしあやしきよ

○初、いはくら村のナリシカドくらむらノ續、調可ナラザレバ更ヘタルナリ。此村初北岩倉ト稱セシテ後ニ北ヲ省キタダ岩倉ト稱セシナリ。初二節ハ岩倉具視朝臣（後ノ贈太政大臣具視公）ノ幽棲ヘ志士ノ夜シノビテ來レル趣ヲ歌ヘルナリ。岩倉ハ朝臣ガ政變ノ爲ニ朝譴ヲ蒙リシ文久三年ノ冬ヨリ勅勘ヲ免ゼラレシ慶應三年ノ冬マデ五年餘ノ間蟄居セシ地ニテソノ大工某ノ舊宅ヲ買ヒシ陋居ハ實ニ諸藩ノ志士ノ來リテ朝臣ヲ中心トシテ維新ノ大業ヲ計畫セシ處ナリ。其家屋今モ保存セラレタリ。當時所司代サヘ此處ガ策源地タル事ニ心ヅカザリシナリ

## 老の坂

谷に沿ひたる花を見て、たやすくのぼるおいの坂、洞道クキチいづれば  
きこゆなり、丹波の國のとりこゑ

○初、實際ニ即シテ道をはさめるト作りシカド道トくきぢト、道トイフ語重複スルガ故ニ（みちをト花をトをノ重複スルハココニテハ調ヲ害セズ）否花ノ隧道ト實ノ隧道ト重複スルガ故ニ谷にそひたるニ改メタルナリ。山城國乙訓郡大枝村オトクニ オホエ沓掛ト丹波國南桑田郡シノ篠村王子トノ間ニ横タハル山ヲ大江山トイフ。萬葉集卷十二ニ丹波道タニハチの大江の山のさなかづら云々トイヒ小式部内侍ガ大江山いく野の道のとほければ云々トヨメルモノ即是ナリ。其坂路ヲ老ノ坂トイフ。古ノ驛路今ノ國道ニテ逆臣明智光秀ガ丹波ノ龜山（今ノ龜岡町）ヲ發シテ本能寺ヲ襲ヒシ時ニ越エシ峠ナリ。老ノ坂ハ大江ノ坂ノ轉訛ナリ。光秀ノ事ヲ書ケル諸書ニ坂ヲ大江ノ坂トモ山ヲ老ノ山トモ書ケリ。今ハ山上ニ隧道ヲ穿チタレバ以前ノ如ク山頂



山 崎

山と河とのほさみたる、このところだに守らずて、天王山をあらそひし、明智に似たる人もあり

○山崎ハ古書ニ石扁ニモ土扁ニモ書ケリ。古河陽離宮(河ハ北ヲ陽トイフ)山城ノ國府(離宮ヲ轉用ス)及山崎驛ノ在リシ處ニテ攝津トノ界ニ接セリ。西北ニ天王山聳エ東南ニ淀川流レタリ(對岸ハ即男山ナリ)。サレバ其地狹隘ニシテ戰略上ノ要害ナリ。山崎合戰ノ行ハレシハ天正十年六月十三日ナリ。ソノ前日秀吉光秀兩軍ノ間ニ天王山ノ爭奪戰行ハレ僅ニ一步ノ差ニテ山ノ頂ハ秀吉ノ軍ニ占領セラレキ。今モ「敵味方ノ天王山」ナドイフ諺ノ行ハルル如ク此山ハ兩軍ノ爭點ナリシナリ。ツラツラ思フニ光秀方ノ占領ニヨリテハ山下山崎ニ在ル秀吉ノ軍ハ脅威ヲ受クルニ過ギザルベク之ニ反シテ秀吉方ガ占領セバ山ノ東北方ニアリテ光秀ノ本陣ナル勝龍寺城ハ得支ヘザルベク從ヒテ光秀ノ軍ハ敵ヲ腹背ニ受クベシ。

サレバ光秀方ニ取リテハ天王山ヲ争ハムヨリハ山崎ヲ守リテ敵ヲ通サザラムガ大切ナリシナリ

△第四節ノ明智に似たる人もありハ迂濶ナル一部ノ政治家ヲ嘲ラレタルナリ。但政治家ヲラズトモ以テ誠トスベシ

### 鷺坂

久世のさぎ坂うちゑみて、おりくるこころ悟りきや、わづかなれども人まろの、ふみけむ路をふみしから

○京都府久世郡久津川村大字久世ヲ通過スル國道(奈良街道)ノ西側ニ久世鷺坂舊跡ト刻メル石標ヲ立テタリ。サレド萬葉集卷九ニ山代の久世の鷺坂トヨメルハ此處ニアラズ。此處ノ少シ南ヨリ東方ノ山林ニ入レバ關西線ノ奈良線通過セリ。線路ヲ越エテ更ニ東ニ行ケバ郷社久世神社ノ下ニ出ヅ。是同集卷七ニやましのろ來背の社トヨメルモノナリト云フ(但山城志ニハ水度神社ヲ之ニ充テタリ)。社ノ東方ニ巾一間ニモ足ラザル坂路アリ。宇治ヨリ長池ニ到ル途中ナリ。是真ノ鷺坂ナリ。社ハ岡ノ南面中腹ニ在リ。ソノ岡即しら鳥のさぎ坂山トヨメル鷺坂山ナリ。頂ハ拓キテ畠トセリ。昭和十一年一月五日此地ヲ踏査シ隨行人々ト離レテ唯一人岡ニ上リ見ルコト三町許、路ハ漸次東北ニ向フガ如シ。萬葉集卷九ニ

見エタル鷺坂及鷺坂山ノ歌三首ハ皆人麻呂ノ作ト思ハル。夙ク新考一七一二頁以下ニ云ヘリ。久世ハ今くゼト唱フレド古ハセテ清ミシニ似タリ

木津川

かさぎの山のいただきに、腰うちかけておほびとの、うちしつぶてかきづ川の、瀬々にちりたるおほ岩は

○笠置山ニハ大岩多シ。木津川ハ其直下ヲ流レソノ川床ニモ亦大岩多シ。巨人傳説ハ常陸風土記那賀郡大櫛岡ノ下・播磨風土記託賀郡ノ下ナドニモ見エタリ

奈良

馬<sup>バ</sup>醉<sup>ス非</sup>木<sup>ボク</sup>とぞ文字は書く、鹿も醉ふべし馬<sup>バ</sup>ゑはば、あせみの垣には  
口觸れず、鹿は假名だに知らねども

○鹿ノアセミヲ喰ハヌハ天性ナリ。奈良ノ人家ノ生垣ノ皆アセミナルハ外ノ木ニテ作レバ  
鹿ノ喰フガ故ナリ。あせみトあしびト別ナル事ハ萬葉集新考二二〇頁ニ云ヘリ。あせみハ  
アセボナリあしびハボケナリ

春日山

代<sup>タイ</sup>赭<sup>シヤ</sup>群<sup>グン</sup>青<sup>シヤウ</sup>さまさまの色うつくしきかすが山、まんえふ集にいか  
でかも、あせみのわか葉の歌のなき

○萬葉集ニいそのうへにおふる馬<sup>ア</sup>醉<sup>セ</sup>木<sup>キ</sup>をたらめど(卷二)山もせにさける馬<sup>ア</sup>醉<sup>セ</sup>木<sup>キ</sup>の  
からぬ(卷八)瀧の上の馬<sup>ア</sup>醉<sup>セ</sup>木<sup>キ</sup>の花ぞ土におくなゆめ(卷十)奥山の馬<sup>ア</sup>醉<sup>セ</sup>木<sup>キ</sup>の花の今さか  
りなり(同)春日山の馬<sup>ア</sup>醉<sup>セ</sup>木<sup>キ</sup>の花のくからぬ(同)もと邊は馬<sup>ア</sup>醉<sup>セ</sup>木<sup>キ</sup>はなさき末へは椿はな  
さく(卷十三)ナドアレド若葉ヲヨメル歌ハ見エズ

森の村夫子

九二

真弓の岡のみささぎを、道くるをぢに尋ねれば、ふたつに道のわかれたる、ひだりの方へ入るべきを 其一

又のをりにぞまゐりてむ、車をやれとわがいはば、大手ひろげてさへぎりて、あとへもどれとののしりつ 其二

御はかをかみて人々に、事ときをへてまかづれば、うしろの方に膝つきて、あなゆゆしやと手をぞ摩る 其三

○昭和八年十月九日和歌山ヨリ奈良へ赴ク途中大和高市郡ニテ岡宮天皇陵ヲ拜セムト欲シ一老人ノ向ヒ來ルニ逢ヒテ御陵ニ到ル道ヲ問ヒテ夙ク行過ギシコトヲ知ル。余曰ク「此

上オクレテハ奈良デ待ツテ居ル片山君等ニ氣毒ダカラ參拜ハ斷念セウ」ト。老人之ヲ聞イテ大聲ヲ發シテ曰ク「アカンアカン。ココマデ來テ御陵ニマキラント云フ事ガアルモンカ。アトモドリアトモドリ」ト。又余ノ風采ヲ伺ヒテ曰ク「縣會議員サンノ御禮マハリカイナ。市長サンカイナ」ト。余曰ク「然ラバ案内シテクレルカ」ト。老人承諾ス。ヨツテ運轉手ノ横ニ乗ラシム。老人將ニ車ニ乗ラムトシテ「和歌山縣廳ノ車ヤナ。コレガ御差廻シノ自働車ト云フノカイナ」トイヒ又車ニ乗リシ時一行ノ一人ガ萬葉集ヲ手ニセルヲ見テ「ヤ萬葉集ヲ見テ居ルナ」ト云フ。松崎謙二郎君戯レテ「君ハイロイロナ事ヲ知ツテ居ルネ」ト云ヒシニ「三人行ケバ必我師アリト云フサカイニナ」ト云フ。サテ參拜ヲ了ヘシ後人々ノ乞ニ依リテ簡單ニ草壁皇太子ニ關セル當時ノ政界裏面ノ事情ヲ語ル。多クハ國史ノ文字ニ現レザル事ナリ。老人モ亦謹聽ス。右終リテ更ニ一拜シテ御陵ヲ辭セムトス。老人俄ニ地上ニ坐シテ「ワルイ事ヲ云ウタナ。アア勿體ナイ勿體ナイ」ト云ヒテ頻ニ拜ミキトイフ。老人ハ御陵ノ南ナル森ノ人ニテ其祖父ハ此御陵ノ決定ニツイテ功勞アリ、老人モ亦ヨク皇太子ノ御事蹟ヲ知レリトゾ

九三

昆陽池

こや音にきくこやの池、いく千町にか引きつべき、よそ人われも  
をがみけり、行基菩薩の功德水

○昆陽池ハ金葉集ナルしながどりるなの柴原風さえてこやの池水こほりしにけりヲ始トシ  
テ世々歌枕トセリ。猪名武庫二川ノ間ニ在リテ伊丹町ノ西方ニ當レリ。廣袤六町許、僧行  
基ノ造レルナリト云フ。此池成リテ猪名野ハ始メテ美田トゾナリケム。今モ下手ノ諸村ハ  
ソノ灌溉ノ恵ヲ蒙レリト云フ。くどくするハ行基ノ功德ニ成リシ池水トイフ意ニ云ヘルナ  
リ。極樂淨土ニアリト云フ八功德水即功德池トハ別義ナリ

白髭神社

あけの玉がき波の上<sup>へ</sup>に見えしところ<sup>に</sup>にけふは來ぬ岸より沖<sup>も</sup>  
たへなれど、沖から岸ぞさらによき

○白髭神社ハ近江滋賀郡小松村鵜川ニ在リテ高島郡トノ界ニ近シ。岸より沖もハ岸より沖  
を見るもニテ沖から岸ぞハ沖から岸を見るぞナリ。初、沖より岸ぞナリシカド誤リテ「沖  
ニ比シテ岸ゾ」ト心得ル人アラムカト思ヒシニヨリテ沖からニ改メタルナリ。からハ古語  
ニテ俗語ニアラズ。沖からト續ケル例モ古今集ニ波の花沖からさきてちりくめりトアリ。  
第三節モロヲ衝イテ出デシハ岸より沖もよけれどもナレドもノ重複、調ヲ損ズルガ故ニ修  
正シタルナリ

△岸より沖もト沖から岸ぞト共ニ見るヲ略セラレタルガ妙ナルナリ。琵琶湖中ヨリ白髭神  
社ヲ望マレシハ昭和四年六月、神社ヲ參拜セラレシハ九年十月ナリト云フ

藤樹書院

車とどめて村びとに、書院のありかを問はずれば、ひざを正して  
手をつきて、ねもころごろにをしへけり

○是實事ナリ。今モイタク先生ヲ崇敬セリト見ユ。此ノ美風ノ原ハ先生ノ遺徳ノミニ歸ス  
ベカラズ。一行中ノ山田壽房君云ハク「此小川村カラ出タ下男ハ安心シテ使ヘマス」ト。  
尊キカナ

楠木正成

岩ぎしたかきちはや川、にごらぬ水ぞながれゆく、しばしば認め  
てきはめばや、君がこころのみなもとも

○千早川ハ石川ノ一源ニテ河内ノ東南端即大和界ノ千早越附近ヨリ發シ千早城址ノ西ヲ北  
流シテ東條川トナリ西條川ト相合シテ石川トナレリ。此谷川ノ左岸ニ沿ヒテ千早城址ニ到  
ルナリ。思フニ大人格者ノ心源ヲ究ムルハ僧堂ニ趺坐シテ禪爺ニ翻弄セララルルニ優ルベシ

千早城址 其一

手おひ死人の數おほみ、かけど記せどつくされず、百萬人も口々にへり、十<sup>ト</sup>がひとつとなりけり

○太平記卷七千劍破城<sup>チハヤ</sup>ノ軍ノ事トイフ條ニ「千劍破城ノ寄手ハ前ノ勢八十萬騎ニ又赤坂ノ勢吉野ノ勢馳加リテ百萬騎ニ餘リケレバ」ト云ヒ又「手ヲ負ヒ死ヲ致ス者一日ガ中ニ五六千人ニ及ベリ。長崎四郎左衛門尉軍奉行ニテ有ケレバ手負死人ノ實檢ヲシケルニ執筆十二人夜晝三日ガ間筆ヲモ置ズ記セリ」ト云ヒ末ニ「八十萬騎ト聞エシカドモ今ハ纔十萬餘騎ニ成ニケリ」ト云ヘリ。因ニ云ハム。ちはやヲ千劍破トモ書クハ不常識ナル僧ナドノ作製シタル擬字ナラム。はニ劍ヲ充テヤニ破ヲ充ツベカラズ、又やぶるヲ略シテヤトハ云フベカラザレバナリ。萬葉集ニちはやぶるヲ千磐破ト書ケリ。コハ千磐<sup>チイハ</sup>ヲちはニ充テタルナリ。コレナドヲ基トシテ傳會シタルニコソ

千早城址 其二

唯千人のこもりたる、小じろひとつを攻めあぐみ、連歌などしてあそぶ間に、主上は隱岐をいでましき

○同ジ條ニ「此勢ニモ恐レズシテ纔ニ千人ニ足ヌ小勢ニテ誰ヲ憑ミ何ヲカ待共ナキニ城中ニ堪ヘテ防戦ヒケル楠ガ心ノ程コソ不敵ナレ」ト云ヒ又「長崎四郎左衛門尉此有様ヲ見テ此城ヲ力攻ニスルコトハ人ノ討ルル計ニテ其功ナリガタシ。唯取卷<sup>ジキゼン</sup>テ食攻ニセヨト下知シテ軍ヲ止ラレケレバ徒然ニ皆堪兼テ花ノ下<sup>モト</sup>ノ連歌師共ヲ呼下シ一萬句ノ連歌ヲゾ始タリケル」トイヒ又「軍モ無テソゾロニ向居タル徒然ニ諸大將ノ陣々ニ江口神崎ノ傾城共ヲ呼寄テ様々遊ヲサセラレケル」ト云ヘリ



千早城址 其三

君をたふとぶものは勝ちあまつ日さふる雲は消ゆたとひくす  
の木ならずともたとひ降れる世なりとも

○初あまつ日おほふト作りシカドおほふノ三言詠ヒニクケレバ改メツ

△對ヲ破リテあまつ日さふる雲はきゆト云ヒたとひくだれる世なりともト云ハレタルガ面  
白キナリ。若正對ニ泥ミテ君をあなづるものは負クナドイヒたとひ北條ならずともナド云  
ハバ平凡ナルベシ

楠木正成銅像

くすの木まさしげひとりにぞ御かどの原は許してむあだし人  
にはゆるさじとのたまひきとぞあなかしこ

○銅像ヲ宮城前ノ廣場ニ建テムトセシ時明治天皇ノ勅許ヲ乞ヒマツリシニ右ノ如キ仰アリ  
キト云フ。コハ宮内省ノ大官某君ヨリ聞キシ所ナリ。御かどの原ノ語例ハ萬葉集卷二ナル  
柿本人麻呂ノ高市皇子尊城上殞宮之時作歌ニ見エタリ

## 楠木正行

敵のことごとたひらぎて、鎧ぬぐ世とならませば、まづはじめに  
はみなと川、ゆきて見ましをさくら井も

○正行主ノ心ニナリテ云ヘルニアラズ。サレバゆきて見ましをノ主格ハ我ハニアラデ君は  
ナリ。ましトイフ辭ヲ使ヒタレバ聞キマガフベクハアラネド、ナホ初心者ノ爲ニコトワリ  
オクナリ。後ノ二節ハ「マヅ初ニハ湊川ヲ往キテ見マシヲ、次ニ櫻井ヲモ往キテ見マシヲ」  
ト云フベキヲ互文格ニテ云ヘルナリ。常ノ互文格ヨリ複雑ナレバコハ或ハ聞キマガヘラル  
ベシ

## 四條畷神社

母のみことをみちびきて、膽駒の峯をやつたふらむ、なはての道  
を指ざして、その日の事をや語るらむ

○前後各二節ヲワザト相似タル句格ニシタテタルナリ。兩段ノ間ニさてヲ挿ミテ聞クベシ。  
別格官幣社四條畷神社ハ大阪府北河内郡甲可村カカ(今ノ四條畷村)大字南野ニ在リ。抑ナハ  
テト云フハ田間ノ直路ナリ。又四條トイフ處此附近ニニアリ。一ハ同郡四條村大字北條字  
四條ニテ一ハ中河内郡枚岡南村ヒラフカ(今繩手村)大字四條ナリ。太平記ニ始メテ四條畷合戦ト  
云ヘル四條畷ハ(異説モアレド)前者ノ地先ナル京街道ヂヤキ(即今イフ東高野街道)ナリ。後  
村上天皇ノ正平二年ノ暮足利高氏、高師直兄弟ヲシテ大軍ヲ起シテ楠木氏ノ根據ヲ衝カシ  
ム。正行正時兄弟之ヲ聞イテ「師直ノ首ヲ我手ニ懸クルカ我等ノ首ヲ彼ニ取ラルルカ、二  
ツノ中ヲ出デジ」ト決心シ師直兄弟ノ軍八萬ニ對シテ僅ニ三千人ノ兵ヲ率キ、逆寄シテ今

中河内郡ニ到リ、今ノ枚岡南村大字六萬寺ナル往生院ヲ本陣トス。師直ノ軍モ亦進ンデ北河内郡四條村ノ四條ニ到ル。兩軍相去ル事二里許、相通ズルモノハ即京街道ナリ。ココニ聊地理的説述ヲ挿マムニ今神社ノ在ル甲可村ノ南ガ四條村、ソノ南ガ郡カハリテ孔舎衛村、ソノ南ガ大戸村、ソノ南ガ枚岡村、ソノ南ガ枚岡南村ナリ（以上村名ハ明治二十二年後ノ稱ニ從ヘルナリ）。我等懦夫ヲモ奮ヒ起タシムベキ血戰ガ行ハレ殆逆黨師直ノ首ヲ獲ムトセシハ實ニ正平三年正月五日ナリ。正行兄弟ハ破竹ノ勢ヲ以テ北進シテ今ノ四條村大字北條ナル飯盛山下四條畷ニ到リシガ兵盡キ力窮リシカバ弟正時ト差違ヘテ死シ一族從士ノ残りタリシ者悉ク殉死シキ。正行ノ墓ハ甲可村大字南野字雁屋ナル老樟樹下ニ在リテ東面セリ。實ハ此處ノ外ニモ彼往生院ヲ始トシテ正行ノ墓ト傳ヘラルルモノアレド明治七年ニ當時ノ管轄廳ナル堺縣ニテ此處ト決定セシナリ。四條畷神社ハ墓ノ正東ナル飯盛山下ニ在リテ南面シ、墓ト京街道ヲ隔テタリ。初墓頭ニ就キテ神社ヲ建築セムトセシガ其地高敞ナラザレバトテ別ニ地ヲ擇ビシナリ。コハ當ヲ得タル處置ナレド社名ニ就イテハ議スベキ事ナリ。四條畷トイフ社名ハ敷田年治ノ選定ナル由ナルガ恰神社ノ所在地ガ四條畷ナルガ如

ク聞エテ頗マギラハシ。寧飯盛山神社ト稱スベカリシナリ。因ニ云ハム。大日本地名辭書飯盛山ノ下ニ「近年四條畷祠ヲ此ニ造リタルヨリ北條ヲ改メテ四條ト爲ス」ト云ヘル、是亦人ノ誤解ヲ招カム。明治二十二年四月町村制實施ノ時北條村以下八箇村ヲ合併シテ一村トシ之ニ四條ト名ヅケタルナレバ四條村ト云フ名コソ新シケレ四條トイフ地名ハ夙クヨリアリシナルチャ。即太平記卷二十六四條畷合戰ノ條ニ「師直モ翌日三日朝八幡ヲ立テ六萬餘騎四條ニ著」ト云ヘル即是ナリ。河内志ニモ

四條畷戰場 在ニ北四條邑。邑屬ニ北條村。

ト云ヘリ。サレバ四條ハ同書ニ北條屬邑三トイヘル屬邑即字ノ一ニテ、ソガ今ノ大字北條ノ内ナル事ハ初ニ云ヘル如シ。四條畷神社ハ明治二十二年ニ創建セラレシニテ正行ノ母ガ其境内ニ攝社御妣神社トシテイツカレシハ大正十四年ナリ

# 今様歌

第三集

## 緒言

第三集は東京・甲府の門人有志の負擔出版で、その三十篇は二月二十三日から四月八日までの作である。特に愛宕山は二月二十八日に或大官と時事についての意見を交換した直後の作である。此等二三篇の外は皆散歩中に又は枕上で作つたのであるが、枕上の作は元來半醒半睡中の所産であるから朝になつて書留めようと思つても思出さぬ事があつた。

往々今様歌の歴史を尋ねる人があるが古事類苑樂舞部・廣文庫など

を見れば分る。一とほりの事ならば大言海を見ても分る。新に書いて見せたいが其暇が無い。又その必要もあるまい。本来イマヤウウタと云ふべきを略して單にイマヤウとも云ふがイマヤウウタといふ名は紫式部日記狭衣などに見えて居る。枕草子にも「歌は、今やうは云々とある。イマヤウウタとは新式歌謠といふ事である。曲に就いて云へは郢曲即俗曲の一種で、體に就いて云へば和讚から岐れたものである。和讚といふは佛教を宣傳し又は佛徳を禮讚する爲に作つた七五調の歌謠である。經文とちがつて耳で聞いて分りやすい上に、よい聲で歌ふといたく人の心を動かすものであるから大に行はれたのである。和讚中最古く又その代表たるものは空海の作とも勤操の作とも又は護命の作とも傳へられるかのイロハ歌である。初は字數も句

數も一定しなかつたやうであるが追々に七五句四節と定まり又讚佛の外に祝賀の爲に作るやうになつたが、又追々に短歌と同じくあらゆる事物を詠するやうになり、終に和讚から獨立して今様歌と稱せられるやうになつた。唯心房集藤原頼業法名寂然の集、珍書同好會刊行)に見えたる今やう歌などは讚佛と雜詠とを併せ含んで居る。さて雜詠の今様即狭義の今様の中で人口に膾炙せるは源平盛衰記に出でたる後徳大寺實定の

古き都を來て見れば、あさぢが原とぞなりにける、月の光はくまな  
くて、秋風のみぞ身にはしむ

また慈圓の拾玉集に見えたる

春のやよひのあけぼのに、よもの山べを見わたせば、花ざかりかも

しら雲の、かからぬ峰こそなかりけれ  
 秋のはじめになりぬれば、ことしの半はすぎにけり、わが世ふけゆ  
 く月かげの、傾く見るこそあはれなれ

などいふ四季の歌である。近世の作家が好んで第四節を八五としそ  
 の八言句の末にコソを使ふのは主として此四季の歌の調に倣ふの  
 であらう。ツイ筆が走つて今様史のやうにならうとしたがモウよさ  
 う。さて近古又は近世になつては諸家の家集に今様が見えて居る。之  
 を集めたものも色々とあるであらうが強ひて探して見ようとも思  
 はぬ。ただ青年時代に十數篇を諳んじてゐたが、それは何で見たので  
 あらうか聊ゆかしくなつたから遠藤二郎君に頼んでおいた處左の  
 二書を持つて來て見せられた。

古今今様集 白石千別編纂。今様堂藏版。明治十九年八月版權免許。  
 縦四寸横二寸九分の小本なり

近世長歌今様歌集(續日本歌學全書第九編) 佐々木弘編輯。明治三  
 十二年四月發行。今様歌集はその五百三十一頁以下に出でたり  
 前者はまさしく青年の時に見たものである。即余の諳んじてゐた歌  
 の大部分は其中に見えてゐる。此外に加藤櫻老の集めたものも見た  
 やうに思ふたから森銑三君を煩はして探してもらつた。左のものが  
 即それである。

古今々様集 加藤櫻老編輯。明治十一年五月版權免許、同七月出版。  
 縦四寸一分横五寸九分の横本の木版本なり

余の諳んじてゐたものの内二篇は此中にある。卷頭に色波、高野大師

の前に

若菜 菅公 そのふの梅の追かせに、我すむ山も春めきぬ、かど田  
の雪もむら消て、若なつむべく野はなりぬ

とあるが、これは無論假托である。決して菅公の作では無い。又昨年一  
月福岡の岡澤君から左の書を南天莊文庫に寄贈せられた

越天樂填詞 昭和十年一月發行。雜誌國風附録。假綴小本一冊。二川

相近の「鳴のはね搔」と石松元啓輯の今様雜襍とを併せたるもの(襍  
は雜と同字なり。雜集のつもりにや)

右の内加藤氏の古今々様集は最しどけない物であるが、其中に

三芳野 頼山陽 花より明るみよしのの、はるのあけぼの見わた  
せば、もろこし人もこまびとも、やまとごころになりぬべし

とある(明にアケと傍訓せり。無論アクなり)。見ワタサバといはではナ  
リヌベシと打合はぬ。余が第一集の緒言中に

現に自分の暗誦して居る十數篇の中でもよい物はただ一篇で、そ  
れもテニヲハに誤があるから直して歌はねばならぬ

と云へるは適に、此歌である。余は夙くから此歌は山陽の作では無い  
と聞いて居たが相近の「鳴のはねがき」を得て通讀せしに左の歌があ  
つた。

花よりあくる三芳野の、春の明ぼの見せたらば、からくに人もこま  
人も、やまと心になりぬべし

見セタラバはナリヌベシと時の格は相かなうて居るが、手づつであ  
るが上に本來見セナバとあるべきである。又カラクニ人は韓國人と

聞える。それで傳誦者が第二節を慈鎮和尚のかの春ノヤヨヒノアケ  
 ボノニ、ヨモノ山ベヲ見ワタセバに倣うて春ノアケボノ見ワタセバ  
 と直し又第三節をモロコシ人モコマ人モと直したが其人も稚くし  
 てミワタセバではナリヌベシと時格の相かなはぬに心づかなかつ  
 たのであらう。大分時を費したからいよいよこれでよさう  
 あかつき毎にうぐひすの、なくがことしは啼かぬかな、今やううた  
 ふわが聲に、かれぞ小耳をすますらむ

昭和十一年四月十四日

南天莊主人

○は原註△は補註

目次

小鹽山	京都府乙訓郡大原野村	一一九頁
朗詠谷	同 愛宕郡岩倉村長谷	一二〇
愛宕山	京都市右京區	一二二
鷹峯光悅寺	同 上京區	一二三
東山遺物		一二四
兆殿司		一二六
保津川	京都府丹波國	一二七
佛足跡歌碑	奈良縣生駒郡藥師寺	一二九
白毫寺	同 添上郡東市村	一三二
箕面瀧	大阪府豐能郡箕面村	一三四



多田神社 ..... 兵庫縣川邊郡多田村 ..... 一三六

佐久奈度神社 ..... 滋賀縣栗太郡大石村 ..... 一三八

湯峯 ..... 和歌山縣東牟婁郡四村 ..... 一四〇

勝浦 ..... 同 ..... 一四一

姫、松原の五色石 二章 同 ..... 西向村 ..... 一四二

串本 ..... 同 ..... 西牟婁郡 ..... 一四四

潮岬 ..... 同 ..... 同 ..... 一四六

長良川 ..... 同 ..... 一四七

岐蘇川 ..... 同 ..... 一四八

同 ..... 同 ..... 一五〇

同 ..... 同 ..... 一五二

腦出血といふ事を ..... 一五三

庭におりたち ..... 一五五

葡萄栗鼠圖 ..... 一五六

電車の内にて ..... 一五八

散歩中の一興 五章 ..... 一五九

多摩川の二子橋 ..... 一六一

海女 ..... 一六二

秋湖 ..... 一六三

高見山 三章 ..... 伊勢大和國界 ..... 一六五

以上三十篇四十二章

小鹽山

をしほの山のやま石を、采りて世わたる人ぞある、山のかたちは  
かはらずや、業平あそに問ひてまし

○小鹽山ハ山城國乙訓郡大原野村ニ在リ。此村ハ略、古ノ石作郷ニ當リ今モ同村ノ大字ニ  
石作アレバ古、石工此附近ニ住ミキト見ユ。昭和三年一月同村大字大原野ナル官幣中社大  
原野神社ヲ參拜セシ時路傍ニ大キナル山石ヲアマタマロバシタルヲ見テコハイカニト問ヒ  
シニ一行中ノ山田壽房君「アノ山カラ出シテ牛車デ京都ヘ運ンデ庭石ニ致シマス」ト云ハ  
レキ。伊勢物語第七十五段並ニ古今集雜上ニ陽成天皇ノ御母（後稱ニ條后）ノ大原野神社  
ニ詣デタマヒシ時御供ノ内ナル在原業平ノヨミシ大原やしほの山もけふこそは神代の事  
をおもひいづらめト云フ歌見エタリ。勢語ノ一本にしほの松もトアルハワロシ。第四句  
ヲ古今集ノ流布本ニ神代の事もトセルモワロシ

朗詠谷

心ははやく住みぬとも、身になれめやは谷の風、南おもての梅さ  
けど、胸のこほりはなほとけじ

○朗詠谷ハ藤原公任ノ遺蹟ニテ京都府愛宕郡岩倉村大字長谷<sup>ナガタニ</sup>ニ在リ。往キテハ見ネド岩倉  
公ノ遺蹟ヲ訪ヒテノ歸ルサ一行中ノ染谷寛治君車中ヨリ東方ヲ指シテ「アソコガ朗詠谷デ  
ス」ト云ハレキ。大日本史卷一百四十一ナル本傳ニ榮華物語（衣の珠）ニ據リテ

萬壽元年其愛女ヲ喪ヒ憂念シテ輟<sup>ヤ</sup>マズ。遂ニ上表致仕ス。意、薙髮セムト欲ス。然モ兒  
孫<sup>ウベト</sup>ノ肯<sup>コト</sup>ト從<sup>ト</sup>ハザラムコトヲ恐レ堂ヲ造リテ方忌ヲ避クルニ託シ、サテ北山ノ長谷ノ別莊  
ニ入り遂ニ祝髮シテ僧トナル

ト云ヘリ。此時年五十九。愛女トイヘルハ内大臣教通ノ室ナリ。公卿補任ニ據ルニ致仕ハ  
同年十二月、出家ハ同三年正月又薨去ハ長久二年七十六歳ノ時ナリ。世ニ傳フラク朗詠集

ハ長谷ニテ作レルナリト。公任卿集（群書類從卷二百三十六）ニ

世をそむきて長谷に侍りけるころ入道中將のもとより「まだ住なれじから」など申され  
ければ 谷風になれずといかがおもふらむ心ははやくすみにしものを

トアリ。前二節ハ之ニ依レルナリ。又朗詠集ノ初ノ處ニ池凍東頭風度解、窓梅北面雪封寒  
（池凍ノ東頭ハ風度リテ解ケ、窓梅ノ北面ハ雪封ジテ寒シ）トイフ句見エタリ。池凍ハ池氷、  
東頭ハ東邊ナリ。又窓梅ノ北面ノ雪ニ埋モレタルハ南面ノ風ク綻ビソメタルナリ。後ノ二  
節ハ之ニ基ヅキテ「世ハハヤク春ニナリヌレド愛女ヲ失ヒシ悲ハマダ消エジ」ト云ヘルナ  
リ。但木ニ竹ヲ接グベキニアラザレバ谷の風ヲ以テ梅ヲミチビキ出デタルナリ。又彼衣の  
珠ノ卷ニ嶺は梅などいと盛におもしろくトアレバ梅ヲツカヘルモツキナカラジ

愛宕山

やましる人はおもてを見、丹波の人の見るは裏、二くにびとの見  
る所、あげつらふとも相合はじ

○事ニ感ジテ作レルナリ。愛宕山ハ京都市ノ西北隅ト丹波ノ南北桑田郡トニ跨レリ

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が並んでいる）

鷹峯光悦寺

めてに近きはたかが峯、弓手にあをきはひがし山谷のたかむら  
はるばると、こずゑのなびくおもしろさ

○此處ニ遊ビシハ昭和二年十月ナリ。篁ノツヅキタルハ紙屋川ノ堤防ナリ。光悦寺ノ墓地  
ヨリ縦ニ見渡サレキ。今モアリヤ

東山遺物

野山のわらびあらしをひて、飢ゑたる民の探む世をも、かへり見ずして集めけむ、たからの數ぞ罪のかず

○新撰長祿寬正記（群書類從卷三百七十五）ニ

寬正二年ノ春ノ比ヨリ天下大キニ飢饉シ又疾疫悉クハヤリ世上三分二餓死ニ及、骸骨衢ニ滿テ道行人アハレヲモヨホサズト云コトナシ。然ドモ時ノ將軍義政公ハ去ル長祿三年二月花ノ御所ヲ作り是ヲ御テウアイ有、山水草木ニ日々人民ヲツヒヤシ水石ヲ立ナラベ國ノ飢饉ヲアハレミ玉フ事ナク、アマツサヘ新殿ヲツクリ立ラル。其比ノ帝王（後花苑院）是ヲ聞召テ將軍ヘ一首ノ御製ヲ給 殘民爭採首陽薇、處々閉序鎖竹扉、詩興吟酸春二月、滿城紅綠爲誰肥

トアリ。詩興吟酸ハ詩興ガ湧イテモ歌フニ苦シトイフ義ニヤ。第二句ハ近古ノ書ニハ處々

閉爐鎖竹扉トアリ。鎖ハ鎖ト同字ナリ。閉ノ下ハ平字ナルベキナレバ序ニテハカナハズ。爐モ仄字ナリ。花ノ御所ト云ヒ新殿ト云ヘルハ烏丸邸内ニテノ造營ナラム。長祿寬正ノ頃ニハモハヤ室町ニ住マズ又東山ノ慈照寺即所謂銀閣寺ヲ作りシハ後年ノ事ナレバナリ。義政極メテ奢侈ニシテ多ク高價ナル書畫茶器ヲ集メキ。今モソノ遺品ノ傳ハレルヲ茶人好事者ナドハ東山御物ト稱シテ珍重スナリ。御物ト云ハムハ不敬ナリ。宜シク東山遺物ト稱スベシ。元來足利氏ハ義滿以來甚僭上不敬ナルガ彼慈照寺ノ如キモ當時ハ東山殿ニハ止ラズシテ東山御所トモトナヘキ。茶人等ガ東山御物ナド稱スルハ當時ノ習ノ殘レルニテイトアサマシ。ナホ云ハムニ御製中ノ薇ハゼンマイニテワラビハ蕨ナレド天皇ノ指シタマヘルハワラビナルベク又雅言ノワラビハゼンマイヲ攝ネタレバ字義ニハ拘ハルベカラズ

兆殿司

わらぐつのみかころもさへ、肩やれたるをつくろはで、佛忍がく  
といそしみし、筆ぞやがても芬陀利華<sup>フンダリケ</sup>

○兆殿司一號ヲ破草鞋<sup>クサシ</sup>トイフ。五百羅漢ヲ描キシ程、三十二歳ノ時故郷ナル母ヲ歸省セム  
ト思ヒシカド其暇ヲ得ザリシカバ自像ヲ寫シテ母ニ送リキ。其像ヲ見ルニ衲衣<sup>ナフエ</sup>ノ右肩破レ  
タルニ、ソノ破目ノ兩端ヲナホザリニ結び合セタリ。後段ハ畫ヲカキシハ遊戯ニハアラデ  
ヤガテ梵行ナリト云ヘルナリ。芬陀利華ハ白蓮花ナリ。殿司ハ佛殿掛ノ役僧ナリ。明兆<sup>ミンテウ</sup>ハ  
東福寺ノ僧ナリ。殿司<sup>デンス</sup>タリシカバ兆殿司ト云フナリ  
△蓮花ノ荅ハ筆ニ似タレバ筆ぞやがてもふんだりけト云ハレタルナリ

保津川

西海子<sup>サイカチ</sup>の木のならびたる、保津の岸よりふな出して、常の野川と  
見るほどに、今し蔗境に入らむとす 其一

うぐひすのねにきき惚れて、竿あやまつなふな人よ、ラインの川  
瀬にとよみしも、けだしまことは鳥のこゑ 其二

流にまかせばおほ岩に、あたらむ舟をめぐらすと、竿おしあつる  
ならひより、竿ぞうがちしおほ岩を 其三

○蔗正音シャ、慣用音シヨ。さたうきびナリ、晋書卷六十二顧愷之傳ニ愷之每食ニ甘蔗ニ恒  
自尾至本。人或怪之。云。漸入佳境トアリ。コレヨリ蔗境ト云フ熟字ハ生ジタルナリ。

サテいまし蔗境に入らむとすトハ「ダンドンヨクナラウトスル」トナリ

第二章ノ後段ハカノ詩ニ作り繪ニモカケルローレライト云ふ仙女ノ歌ヲ云ヘルナリ。とよみしハひびきしニテヤガテきこえしナリ。けだしハ或はナリ

保津川ノ中流ニ竿ノ痕アル大岩アリ。ソノ孔ハ數百年ノ間ニオノヅカラ生ゼシナリトイフ

△とよみしノとハ清ミテ唱フベシ。濁ルベカラズ

### 佛足石歌碑

人のたくみのくははれば、石のよはひはきはまるを、千とせに餘る世々を経て、鳥の跡さへさだかなる 其一

三十一字五句にして、言は足れるをさらにまた、七字一句を添へたるに、つきぬ歎ぞしられける 其二

○佛足石並ニ佛足石歌碑ハ奈良縣生駒郡都跡村ナル藥師寺ニアリ。佛足石ハ石ノ上面ヲ摩リテ所謂釋迦ノ足跡ヲ刻メルニテ其側面ニ記文ヲ鐫リタリ。歌碑ハ其面ニ恭佛跡歌十七首ト呵嘖生死歌四首ト都合二十一首ノ歌ヲ記セルニテ佛足石ノ後ニ立テタリ。佛足石ハ其記文ニ據レバ文室淨三フムヤノキヨミ(天武天皇ノ御孫)ガ天平勝寶四年即今昭和十一年ヨリ千百八十四年前ニ造リシナリ。昭和十年某月此石ノ下面ニ十三體ノ佛像ト天平勝寶四年壬辰九月七日ト

イフ文字トヲ刻メルヲ發見シキトイフ。歌碑ノ設立ノ年月ト其歌ノ作者トハ確ニ知ラレネド恐ラクハ佛足石ト同時ニ作りシニテ歌ノ作者ハ淨三ナラム。クハシクハ萬葉集新考卷十二附録(二七三九頁以下)ヲ見テ心得ベシ。鳥のあとハ即文字ナリ。鳥のあとさへト云ヘルハ佛ノ跡ニ對シテ云ヘルナリ。さだかなるノ下ニ不思議サヨナドイフコトヲ略シタルナリ。サレバコソさだかなりト云ハテ略辭格ニテさだかなるト云ヘルナレ

二十一首ノ歌ハ特異ナル體ヲ具ヘタリ。サレバ後世此體ヲ佛足石體ト稱ス。抑短歌ハ五七、五七、七ノ五句三十一字ヨリ成レルヲ右ノ歌ハ末ニ更ニ七言一句ヲ添ヘタレバ六句三十八字ヨリ成レリ。ココニ旋頭歌トイフモノアリ。亦六句三十八字ヨリ成レリ。然ラバ佛足石歌ト旋頭歌ト同體ナリヤト云フニ旋頭歌ハ五七七、五七七ニテ剩句第三句トナレルニ佛足石歌ハ五七、五七、七七ニテ剩句第六句トナレリ。又旋頭歌ニ在リテハ六句ニテ適<sup>アサ</sup>ニ意ヲ盡セルヲ佛足石歌ニ在リテハ第五句ニテ意ヲ盡シ第六句ハ多クハ辭ヲ更ヘテ第五句ノ意ヲ反復セリ。タトヘバ

御跡つくる、石のひびきは、天にいたり、地さへゆすれ、父母がために、諸人の爲に

よき人の、まさ目に見けむ、御跡すらを、われは得見すて、いはにゑりつく、玉にゑりつく

ノ如シ。但又

この御跡を、たづね求めて、よき人の、います國には、我もまるでむ、もろもろをゐてノ如キモアリ。所詮旋頭歌ト佛足石歌トハ體相異ナリ。然ラバ佛足石歌體ハ此歌ノ作者ノ創メシナルカト云フニ夙ク山上憶良ノヨミテ萬葉集卷五ニ出デタル

常知らぬ道の長手をくれぐれといかにか行かむかりてはなしに、一云かれひはなしに家にありて母がとり見ばなぐさむる心はあらし死なば死ぬとも、一云後は死ぬとも

ナドイフ五首一聯ノ歌アレバ先例ハアルナリ。此體ハ恐ラクハ憶良ノ創案ナラム(新考九六五頁参照)。但憶良ノ此一聯ノ歌ト佛足石碑ノ歌ト全然同體ナリトハ云フベカラズ。カノこの御跡を、たづね求めて、よき人の、います國には、われもまるでむ、もろもろをゐて

ノ如キ第六句ヲ第五句ノ一云トハ認ムベカラザレバナリ。サテココノ歎ハ讚歎ナリ



ビヤクガウジ  
白毫寺

寺のまへなる道なかに、茶みせの牀几をうつさせて、おち葉の雨を  
をあみながら、しぶ茶すすりていこひけり 其一  
めづらしき物みるごとく、村のわらべのあつまるに、菓子をやら  
むとさし出せば、あとじさりしつことごとく 其二  
此村の子はあまきもの、好まぬにやとつぶやけば、茶みせのおう  
な立出でて、わがおろけさを笑ひけり 其三

○白毫寺ハ大和國添上郡東市村ノ大字ニテ奈良市ノ東南ニ當リ高圓山ノ下ニ在リ。古ノ高  
圓野ノ内ナラム。此處ニ遊ビシハ昭和二年十月ナリ。若暮春ナラバ第一章ノ第三節ハちり

くる花をあみながらト云ハマシテ。茶店ノ老婦、余ノ獨語ヲ聞イテ余ノ爲ニ「遠慮ダंगा  
ナ」ト説明シキ。おろけさハカク云ヘル例ヲ知ラネドのどけさ・しづけさ・あたたけさナ  
ドヨリ推セバおろかさト云ハデおろけさト云フベキナリ。夙ク黒川春村ノ碩鼠漫筆四〇頁  
ニ云ヘリ

## 箕面瀧

もみぢのなかのやすみ屋に、まうけありせば一夜ねて、谷の氣ケき  
よきあかつきに、我のみ瀧を見てましを

○箕面ミノオ瀧ハ大阪府豊野郡箕面村大字平尾ニアリ。ソノ高サ凡十六丈、元來箕面川ノ河床ノ  
絶壁ヲ成セルナリ。大阪ヨリ遙ニ北方ニ當リ(十三橋ヨリ五里許)池田ヨリ近ク東北ニ當  
レリ。平尾ノ部落ヨリ箕面川ニ沿ヒテ登ルコト二十町許、谿ニカヘテ多シ。又瀧ノ邊ニ休  
憩所ヲ設ケタリ。昔ハサコソアリケメド今ハ公園トナリタル上ニ大阪ヨリノ交通頗便ナレ  
バ遊人群集シテ幽邃ノ趣殆無キハ已ムヲ得ザルナリ。稱呼ハみのおニテ今專箕面ト書ケド  
古キ物ニ又箕尾ト書ケリ。箕面ト箕尾トイヅレガ古キカ知ラネド夙ク元亨釋書ニ箕面山箕  
面寺ト書ケリ。否今昔物語卷十五ニ攝津國豊島郡テシマの箕面の瀧の下方に云々トアリ。箕面寺  
一名瀧安寺ハ平尾部落ト瀧トノ中程ニアリ。サテ若箕尾ガ正シクバ訓ハみのをナラザルベ

カラズ。タトヒ箕面ナリトモ面ヲおトヨムベキニアラネド或ハモト箕面ト書キテみのおも  
ト唱ヘシチャウヤウニもヲ除キテ發音セザルニ至リシニアラザルカ。今或ハみのもト唱フ  
ルハ箕面ノ文字ニ泥メルサカシラナリ

多田神社

七百年の武家の世の、そのみなもとはこのところ、多田の河内の  
やしろにぞ、運をねがはばいのるべき

○多田神社ハ攝津國川邊郡多田村大字多田院ニ在リテ多田川ニ沿ヘリ。源家ノ祖鎮守府將  
軍滿仲ヲイツケリ。墓ハ社後即鷹尾山ノ麓ニアリ。滿仲ノ訓ハみつなかなリ。マンヂユウ  
ト唱フルハ俗ナリ。

○彼俊成・定家・家隆ノ如キ夙ク其世ニモシ、  
ムンゼイ・テイカ・カリユウト唱ヘケメド  
(家隆ノ如キハ明證アリ)元來俗間ノ稱呼ナレバ公ニハトシナリ・サダイヘ・イヘタカト  
ゾ唱ヘケム

晩年剃髮シテ名ヲ滿慶ト改メ多田新發意ト稱シキ。長徳三年八月卒ス。壽實ニ八十六。多  
田川ハ猪名川ノ上流ナリ。此處ニテモ猪名川トモ稱スレド多田トイフ地名ヲ挿ミタクテ特

ニ一稱ニ從ヘルナリ。其川、北方ヨリ來レルガ急ニ東方ニ彎曲シテ社地ヲ抱ケルニヨリテ  
多田のかふちト云ヘルナリ。又源賴朝ハ滿仲八世ノ孫、足利モ徳川モ皆源氏ニテ滿仲ノ子  
孫ナレバ七百年の武家の世ト云ヘルナリ。みなもとニ姓ノ源ヲ寓シタルハ勿論ナリ。當社  
ハ今縣社ニ列セリ。別ニ同村大字平野ニ郷社多太神社アリ。コハ式内社ナリ。相混ズベカ  
ラズ

佐久奈度神社

一三八

よしありげなる御やしると、車をおりつ川合にて、人めづらしみ  
姫神も、すだれごしにや見ますらむ

○佐久奈度神社ハ延喜式近江國栗太郡大座ノ一ナリ。ソノ所在ハ同郡大石村ニテ瀬田川  
ノ鹿跳橋ノ少シ下手ニテ信樂川ノ瀬田川ニ合流セル處ナリ。祭神ハ瀬織津姫命ナリ。今ハ  
縣社ニ列セラレタリ。昭和八年十月石山ヨリ山城ノ宇治田原ニ出デムトシテ偶然ニ參拜セ  
シナリ。平素ハ知ラズ、當時ハ社司モ居ザリキ。社ノ後ハ瀬田川、對岸ハ水ニ臨メル山ニ  
テ神ノ御心モサコソト思ハレキ。大祓ノ祝詞ニ

高山の末短山の末より佐久那太理に落たぎつ速川の瀬に坐す瀬織津比咩と云神大海の原  
に持出なむ

トアリ。社號ノさくななどハ右ノさくなだりノ轉訛ニテさくなだりにハ水ノ高處ヨリ落下ル

狀ヲイフ語ナリ。今コノ附近ヲ櫻谷トイフハ又さくなだりノ轉訛ナリ。近古ノ人ノ書ケル  
モノニ此社ヲ櫻谷ノ宮ト云ヘリ。因ニイハム。郡名ノ栗太ハくりもとトヨムベシ。今くり  
たト唱フルハ所謂百姓訓ナリ。ナホ云ハバ古ハくるもとト唱ヘシナリ。卽和名抄郷名ニ栗  
本（久留毛止）トアリ。くりヲ下ヘツヅクル時ニハくるト云ヒシニテ栗栖ヲくるすと云フ  
ト同例ナリ。又或語ヲ下ヘツヅクル時ニ第二段ヲ第三段ニ轉ズルハ神ヲかむ（かむろぎ・  
かむろみナド）幸ヲさつ（さつ弓・さつ矢・さつ人ナド）トイフ類ニテメヅラシキ事ニア  
ラズ。又字ハ古典ニ栗本トモ書ケリ。タトヘバ延喜式ニハ栗太ト書ケルヲ和名抄ニハ栗本  
ト書ケリ。國史ニハ貞觀十七年紀ニ栗本郡ト書ケルヲ始トス。ソレヨリ前ハ皆栗太ト書ケ  
リ。トモカクモ多クハ栗太ト書ケルヲ後ニ彼百姓訓ニテくりたトヨミ更ニ後ニ栗田トモ書  
キシヲ今栗太ニ復シタルハ可ナレド、ナホくりたト唱フルハアカヌ事ナリ。若「イカデカ  
栗太ト書キテくりもとトヨム」ト傾キ思ハバ字ヲ栗本ニ改メテ可ナリ。文字ハ更ヘモシ  
ツベシ。稱呼ハ更フベカラズ。コハ本郡名ノミニ就イテ云フニアラズ。又因ニ云ハム。此  
大石村ハ大石良雄ノ祖先ノ代々領セシ處ナリ。其大字大石中ニ大石氏ノ屋敷址アリ

一三九

湯 峯

秋もさやけき月を見じ、咽びや鳴かむさをしかも、熊野のおくの湯のみねは、たえず烟にこめられて

○和歌山縣ノ牟婁郡ニ遊ビシハ昭和八年五月ナリ。其六日ノ夜、船ニテ大阪ヲ發シ七日午  
前勝浦港ニ著シ直ニ新宮ニ到リ所謂プロペラ船ニテ熊野川ヲ上リ更ニ支源北山川ヲ上リテ  
下トロ及上トロヲ見、二川合流ノ處マデモドリテ又熊野川ヲ上リ其夜ハ湯峯ニ宿リ八日本  
宮ヨリ熊野川ヲ下リ勝浦ニ宿リ九日姫ノ松原・串本ヲ經テ潮岬ニ遊ビシナリ。湯峯ハ東牟  
婁郡四村ノ内ニテ本宮ノ西南半里許ニアリ。温泉ノ蒸氣恰モ霧ノ如ク晝夜濛々トシテ里中  
ニ滿テリ

勝 浦

海にしみづのいそに湯の、わくやかつらのくしきかな、あかぬ事  
なきまうけにも、あかぬ事あり いそぐ旅

○勝浦町ハ東牟婁郡ノ内ナリ。今かつうらト云フヲ、つニうノ含マレタル上ニ他國ノ地名  
ニ今かつうらト云フヲ古かつらト唱ヘシ證アレバ調ニ就キテワザトかつらト歌ヘルナリ。  
同處ニテハ越ノ湯トイフニ宿リキ。主人港内海中ノ一地點ヲ指シテ曰ク「彼處ニ清水ガ湧  
キマス」ト。ゲニ舟人が就イテ汲ムベク設備シタリ。コレコソハイト不思議ナレ。客室ハ  
直ニ岸壁ニ臨ミテ其間僅ニ人ノ通り得ル許ナルニ一行中ノ一縣屬、岸上ヨリ扱ニテ章魚ヲ  
突キテ見セシモ興アリキ。紀州ニテ三宿セシ内再往キ見タク思フハ此處此家ナリ

姫松原の五色石

一四二

とれどもつきぬ五色石、いづくよりたがおぎなふぞ、海の祕密は  
人しらず、魚か貝かに問ひてまし 其一

この松ばらをおもしろみ、わたの底からよひよひに、神のをとめ  
の來てあそぶ、その袖よりやこぼるらむ 其二

○姫ハ東牟婁郡西向村（西向カヒ）ノ大字ニテ同郡ノ西端ニアリ。余ガ此地ヲ通過セシ時恰道普請中ナ  
リシカバ車ヲ下リテ少シバカリ歩行セシニ普請用ノ礫ノ中ニ白石ノ圓キガアマタ見エタレ  
バ「コレハ萬葉歌人ガ紀國ノ家苞ニシタ玉ノ内デアラウ」ト云ヒテ「何處カラ持ツテ來タ  
カ」ト問フニ「此濱ニ澤山ゴザイマス」ト云フ。「ソレデハ」ト云ヒテ濱ニ出デ見シニ一行  
中ノ一人、種々ノ色ナル小石ノ圓クシテ美シクサナガラ豆菓子ノ如クナルヲ拾ヒテ「コレ

モ此濱ノ名物デゴザイマス」ト云フ。「少シ拾ウテ行カウ」ト云ヒテ人々ト共ニ拾ヒ集ムル  
ホドニ村吏、カネテ村人ノ拾ヒオケルヤヤ大粒ニテ取分キテ美シキヲ小函ニ入レテ持來リ  
キ。ヨク見ルニ多クハ白色黑色茶色褐色ナドナルガ稀ニハ赤キモ又白色ニテ透明ナルモ交  
レリ。稱シテ五色石ト云ヒ透明ナルハ姫石トモ姫白石トモ云フトゾ。同年十月下旬本村ノ  
小學校長ガ生徒ヲ引率シテ毎日課業ノ暇ニ拾ヒ集メタルモノヲ彼圓石ト共ニ極メテ多量ニ  
縣廳ヲ經テ送來リシカバ高貴ナル方々ニ献上シキ。當時此事ニ就イテ來リシ縣屬ニ「コン  
ナニ澤山取ツテアトガ無クナラヌカナ」ト問ヒシニ「アトカラアトカラ浪ガ打上ゲルサウ  
デス」ト答ヘキ。不思議ナルカナ

やすめる家のおく庭の、いは間いは間にうゑたるを、何ぞと見ればあなめづら、みつのがしはと濱ゆふと

○串本町ハ西牟婁郡ノ東端ニ在リ。みつのがしは（古クハみつぬがしは）ハ今イフおほたにわたりナリ。此植物ノ事ハクハシク西海道風土記逸文新考二五二頁以下ニ云ヘリ。はまゆふハ今イフ濱おもとナリ。共ニ當地ニ多シ。前者ヲ町吏ガ大たにわたりト云ハデみつのがしハト云ヒシカドみつのがしハトイフ名ガ今モ傳ハレルニハアラジ。恐ラクハ古名ヲ聞知リタルナラム。當時町ヨリ鉢植トシタル一株ヲ寄贈セラレシカバ持歸リシカド内園ノ若葉ガ少シ展ビシノミニテ終ニ枯レ果テキ。他處ニテハ育チガタキモノト見ユ。但昨年新大阪ホテルニ宿リシ時廣間ニ此物ニ鉢ヲ飾レルヲ見キ。はまゆふハ神奈川縣逗子<sup>フ</sup>ナドニモ野生アリテ我等ニハみつのがしハノ如クメヅラシカラネド萬葉集卷四ナル柿本人麻呂ノ歌ニ

み熊野の浦のはまゆふ百重なすこころは念へどただにあはぬかも

トアレバ處ガラサスガニナツカシカリキ

追記 大たにわたりハ今ハ東京ニメヅラシカラズト云フ。本年秋季箱根宮之下ナル富士屋

ホテルニアマタ栽培セルヲ見キ。小田原驛頭ニテモ見キ（昭和十一年十二月三日）

潮岬

一四六

しほのみさきの高原に、牛ぞあそべるのどかにも、岸のしたには  
岩むらの、よせくる浪とたたかふを

○潮岬村ハ串本町ノ南ニ續ケリ。潮岬半島ハ形蜂巢ノ如クニテ串本町ハ其莖ノ處ニ當レリ。  
潮岬ハ日本本州ノ最南端ナリ。但太古ニハ莖ノ處離レテ絶島ナリシニ似タリ。神武天皇御  
東幸ノ御船ハ恐ラクハ岬ノ南ヲ經ズシテ今ノ串本ノ處ヲ過ギシナラム。崖ノ高サ一百二十  
尺。崖下ハ浪イト荒シ。崖上ニハ燈臺・無線電信局及牛牧アリ。海上航行ノ船ヨリモ牛ノ  
遊ベルガ見ユ

長良川

水ゆたかなるながら川、足をひたせるいなば山、時おくれぬとな  
惜みそ、鶉がひのほかげは添へて見む

○長良川ハ岐阜ノ北ヲ東北ヨリ西南ニ向ヒテ流レタリ。今往々東北方、川ニ臨メルヲ金華  
山トイヒ西方、伊奈波神社ノ在ルヲ稻葉山トイフハ誤レリ。稻葉山ハ總名ナリ。古ハ川ヲ  
モ稻葉川トイヒキ。今昔物語卷二十六ニ美濃國因幡川ト云ヘル是ナリ。岐阜市ニ遊ビシハ  
昭和七年十月ナリ



## 岐蘇川 其一

日本<sup>ニ</sup>の國の美濃を右、尾張をひだりに見やりつつ、きを川をこそく  
くんだりしか、こをラインとやあなうたて

○昭和十年十月名古屋ヨリ岐阜縣笠松ニ到ル<sup>ツイデ</sup>便ヲ以テ岐蘇川下リヲ試ミムト欲シ、マヅ犬  
山ニ到リ、ソレヨリ自動車ニテ河ノ右岸ヲ上リ太田橋ヲ渡リテ犬山ト同側ナル岐阜縣<sup>イマツタリ</sup>今渡  
ニ著シ、ココヨリ乗船シテ犬山ニ下リキ。今渡ト犬山トノ間ヲ俗ニ日本<sup>ニ</sup>ライント稱スルハ  
大正ノ初故某君ガイヒ始メシナリトイフ。同君ハ國粹保存説ヲ唱ヘテ一世ノ歐化ヲ警醒セ  
シ程ノ人ナルニカカルヒガ事ヲイヒ始メシハ其趣味ノ爲ニ誤ラレシナラム。犬山城ノ晩照  
ヲサ<sup>ハ</sup>ンセ<sup>ツ</sup>トト云ヒハジメシモ同君ナリトイフ。みのをみぎハ頭韻、をはりをひだりハ脚  
韻ヲ押シタルナリ。あなうたてハ俗語ノト<sup>ハ</sup>ンデ<sup>モ</sup>ナ<sup>イ</sup>事<sup>ニ</sup>當<sup>レ</sup>リ。冒頭ハにッほんこくの  
ト云ハマホシケレド、サテハ諺ハレヌナリ

△しかノカハ清ムベシ。俗語ノしがトハ別ナリ。はト係レバしきトイヒ、ぞ又ヤト係レバ  
せしトイヒ、こそト係レバしかト云フナリ。サレバきを川をこそくんだりしかハタダ岐蘇川  
ヲ下ツタトイフ事ナレドこそノ係ノ時ニハ然るをトイフ意ヲ孕ムナリ

岐蘇川 其二

むかひの岸の見えぬ川、國のうちにもありけりな、へだつるものは雲ならで、はた織るおとのたかき島

○美濃國羽島郡（ノ内舊羽栗郡）川島村ハ笠田島・松原島ナドノ數島ヨリ成レリ。皆岐蘇川ノ中島ナリ。機業ノ盛ナル處ニテ世ニ川島絹ト稱スルモノハ即此島々ノ所産ナリ。尾張國風土記逸文又神名帳ニ見エタル尾張葉栗郡川島神社ハ笠田島ノ白髭神社ナラムト云ヘリ（日本地理志料尾張國葉栗郡江沼郷ノ下ニ）。羽島郡ハ明治二十九年ニ羽栗中島ノ二郡ヲ併合シテ新ニカク稱セシナルガ二郡並ニ海西郡（海部西ノ略）ハ本來尾張國ニ屬セシナリ。此事古典ニ明ナリ。然ルニ近古三郡ハ岐蘇川ニ跨リタリキ。思フニ岐蘇川ノ南東ニ遷リシニ由リテ三郡ハ各二分セラレシナラム。天正十二年豊臣秀吉三郡ノ内岐蘇川ノ右岸ニアル地域ヲ皆美濃國ニ附ケキ。是ニ由リテ尾張ニモ美濃ニモはぐり郡・中島郡・海西郡アルニ

至レルナリ。サテ尾張ニテハ舊ノ如ク葉栗ト書キ美濃ニテハ羽栗ニ改メシハ混亂ヲ防ガム爲ナラム。明治二十九年ニ美濃ノ羽栗中島二郡ヲ合併シテ羽島ト稱セシ事上ニ云ヘル如クナルガ此時海西ハ下石津ト合併シテ海津郡ト稱セラレキ。サレバ葉栗中島二郡ノ稱ハ今ハ尾張ノ專有トナレリ。又尾張ノ海西郡ハ大正二年七月ニ海東郡ト合併シテ海部郡ト稱スル事トナリシカバ今ハ尾張ニモ美濃ニモ海西郡トイフハ存ゼズ。おとハ評判ノ意ヲ添ヘタルナリ。前後兩段ノ間ニ但トイフ言ヲ補ヒテ聞クベシ

岐蘇川 其三

一五二

ひろき堤をくだりつつ、春なりせばとなげくかな、しだれざくらの中道の、ゆけどゆけどもつきせぬに。

○愛知縣葉栗郡ニ屬セル木曾川ノ櫻堤ハ巾三十五尺、上ハ草井村ヨリ下ハ北方村マデ二里餘ニ瓦リテ道ノ兩側ニ櫻ヲ植エタリ。櫻ハ主トシテ立彼岸シダレ彼岸ノ二種ナリ。始メテ之ヲ植エシハ明治十八年ヨリ二十二年迄ノ間ニテ枯死セシモノモ少カラザレド大正ノ末ニ數ヘシニナホ一千八百七十本許アリキトイフ。其後モ時々補植スレバ現在ノ樹數ハ幾許トモ知ラレズ。此櫻並木ノアル處ハ適<sup>マ</sup>ニ河中ノ川島村ト相對セリ

若きものに向ひて戯に、今やう歌を作らむに  
むつかしき題を出し見よといひにしに腦出  
血はいかがと云ひければ笑ひながらに

竹のはやしの七賢の、嵇康叔夜は殺されき、ほかの六たりは知らねども、天年ならばこのやまひ

○西晋ノ世ニ嵇康・阮籍・阮咸・山濤・王戎・向秀<sup>シヤウ</sup>・劉伶ノ七人酒ニ耽リ空言ヲ事トシテ好ンデ竹林ニ遊ビキ。世ニ稱シテ竹林七賢トイフ。七人皆學問又ハ才能ニ長ケタレド、ソノ行ヲ見ルニ決シテ賢トハ稱スベカラズ。サレバ余ハ萬葉集卷三ナルいにしへのななのさかしき人等もほりせしものは酒にしあるらし

ノ人等ヲ人たちトハヨマデ特ニ人どもトヨミキ(新考四四一頁)。カカルカタハ者ドモノ出デシモ畢竟時亂レテ賢士正人が世ニ容レラレザリシ爲ナリ。サレバ獨彼者ドモヲ責ムベカ

ラザルナリ。嵇康字ハ叔夜、文選琴賦ノ作者ニテ琴ニ妙ナリ。鍾會ニ譜セラレテ年四十二  
シテ刑セラレキ。其他ノ六人ノ傳モ晋書四十三ト四十七トニ出デタレバ知ラレヌ事ハ無ケ  
レド、ソコマデ穿鑿セズシテ知らねどもト云ヒタラムガヨキナリ

○

庭におりたちふる太刀の、風斬るおとのここちよさ、あまたの書  
をかきしかど、ああ我いまだおとろへず

△先生ハ昔武藝ヲ學ビ又人ニ教ヘラレ膂力ハタ絶倫ナリキト云フ

葡萄栗鼠圖

一五六

木ねずみいつつこづたひて、えびをもりはむかなしさよ、ひとつ  
びとつの心ぎは、かきあらはせるいみじさよ

○えびハ葡萄ノ實ナリ。其木ヲえびかづらトイフ。もりはむノ語例ハ萬葉集卷十六ニ

吾門の榎の實もりはむもちどり千鳥はくれど君ぞきまさぬ

トアリ。もるハつむナリ。採るナリ。「サヤサヤ草紙」卷一(三十一丁)ニ例ヲ舉ゲタリ。  
かなしさハかはゆさナリ。心ぎハハこころもちト云ハマホシケレド元來近古語ニテえびを  
もりはむかなしさよノ古語ナルト不調和ナレバ語ヲ更ヘタルナリ。心ぎハハ心境ニテヤガ  
テ氣分・こころもちナリ。晝ハ縦二尺四寸八分横一尺四寸六分ノ絹本ニテ一首ノ詩ヲ題シ  
テ丙申秋七月寫於月舫樓、大臨長兄先生并政、海陽余紳ト歎セリ。丙申ハ光緒二十二年(我  
明治二十九年)ニヤ。余音シヤ。紳ト云フ人ハ知ラネド中國人名辭典(三〇二頁)ニ

余穎 海陽人。宇在川。善寫眞

トアリ。此人ノ一族ニヤ。海陽ハ山東省登州府ニ屬セリ

電車の内にて

一五八

腰かがめるが入りくるに、むしろゆづりて年間へば、はや七十ぢ  
になりはべり、さらば我にはいもうとぞ

散歩中の一興

わがゆくあとをしたひ來て、人なき處をうかがひて、さもしたし  
げにいひよりて、わがたたずめはたたずみぬ 其一

川のつつみにわが行けば、かれも堤にのぼり來ぬ、たばことりい  
でわが吸へば、彼もたばこをとりいでぬ 其二

杖をひだりによこたへて、うづまく淵を見つむれば、又さしより  
て尋ぬらく、なにゆる水を見たまふぞ 其三

かれの眼を見すゑつつ、この時はじめて答ふらく、かのあを淵に  
わるものを、投げこまむかとおもひてぞ 其四

一五九

つつみの陰の蘆生より、鴉のひとつとびたてば、あなやといひて  
にげゆくに、まてまて我もゆきなむぞ 其五

△「蘆原カラ鴉ノタツタノハ作事ダカ此二節が無ケレバ歌ニナラナイカラナ」ト笑ヒナガ  
ラニ語ラレキ。又前ノ二章ノ終ノぬニテ後ノ三章ノ終ノぞナルハ偶然ニハアラズト云フ

多摩川の二子橋

雪まだらなるとほ山の、そのいかしさぞ身にせまる、こころきた  
はむ人は倚れ、この長橋のおばしまに

○たま川ハ川ニハ多摩ト書キ沿岸ノ地（東京市世田谷區玉川）ノ名ニハ玉ト書ケリ。二子  
橋ハ巾五間、長サ二百四十間ニシシ近年ノ架設ナリ。玉川ト神奈川縣橋樹郡高津町大字二  
子トノ間ニカカレリ。我文庫ヨリ近シ。文庫ハ多摩川左岸ノ丘陵上ニ在レバナリ。橋上ニ  
テ西面スレバ西武藏・甲斐・相摸ノ山々相重ナリテ見ユ。富士山モ西南ニ見エテ腰ヨリ上  
ヲアラハセリ。いかしハ嚴肅ナルナリ。此語ヲ或辭書ニ第一類ノ形容詞トシタルハ非ナリ。  
古ハいかし・いかしきトハタラキシナリ。いかし・いかきトハタラカシタルハ中世以後ノ  
事ナリ。第四節ハ初、この大はしのナリシカド歌ヒニクキニヨリテ改メタルナリ

海女

いそべに鬼のすだけるを、あれこそあまと教へけり、あまてふものは色しろく、見目よきものぞと思ひしに

○すだくハあつまるナリ。伊勢物語第五十七段ニ

むぐらおひ荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり

トアリ。コレハオテン、ハナル女ヲ云ヘルナリ。今ハ之ヲ轉用シテシタタカナル女ニ充テタルナリ。因ニ云ハム勢語ノ註釋ハ藤井高尙ノ新釋ヲ白眉トスル事ナルガ此頃偶然ニソノ一冊ヲ通讀セシニ誤レル説僻メル考イト多シ。新註ヲ試ミル人ハアラズヤ。余ニハ餘力ナシ

秋湖

魚ぞすむらむあまの川、さらばこの世の味ならじ、空にとどかむ  
管もがな、このみづうみにうつさまし

○或人ニ今様歌作製ニツイテノ希望ヲ問ヒシニ「常ノ短歌ノ題デ少シ作ツテ見セテイタダキタイ」ト云フ。ナル程ソレモ人ノ利益ニナルダラウ。然シ第三集ノ分ハ大抵數ニ滿チタヤウダカラ第四集ニサウイフ類モ交ヘル事ニシヨウガ、マヅ一ツ作ツテ見ヨウ。ドウイフ題ガヨカラウカ」ト云ヒツツ座右ノ書ヲ披キシニ秋湖トイフ題見エシカバ「コレガヨカラウ」ト云ヒテ作レルナリ。とどくハ古クハとづくト云ヒキ。とづくハ平安時代ノモノニモ見エタレド短歌ニハナホいたるト云フベシ。但今様歌ノ如キ打解ケタルモノニハとどくと云ハムゾ卻リテヨキ。ましハ「ソナ事ハ出來ハセヌガ萬一出來タラ云々」トイフ場合ニツカフ辭ナリ。御世さかえましトヨメル歌ヲ余ガ不吉ノ歌トシテ斥ケシ話ト共ニ屢人ニ誨



高見山

さやかにはるるたかみ山からすぞひとつ空をとぶとほき昔の  
事なれど、まのあたりなるこちして 其一

いせの海よりのぼる日を、そびらに負ひて矛つきて、かの高ねを  
やこえましし、しるべの神をさきだてて 其二

あらき海路をなづみ來て、つひに大和に入りましたし、その時まづ  
ぞ見ましけむ、くさかの坂はいづへぞと 其三

○高見山ハ伊勢國飯高郡イヒナカ（ノ内モトノ飯高郡）ト大和國吉野郡ノ東北端及宇陀郡ノ東南端  
トニ跨レリ。神武天皇ハ初河内大和ノ界ナル孔舍衙坂クサカノヲ越エテ大和ニハ入ラムトシタマヒ

シニ長髓彦<sup>ナガスネ</sup>ト戦ヒタマヒテ皇軍利アラザリシカバ「我日神<sup>ヒコカミ</sup>ノ御子トシテ日ニ向ヒテ戦フハ宜シカラズ。日ヲ背ニ負ヒテコソ戦ハメ」トノタマヒテ退イテ和泉紀伊ノ海岸ヲ航行シ、那智川ノ河口ニ上陸シ、今ノ新宮市ニ到リ、ソレヨリ熊野川ヲ泝ラムトシタマヒシガ、ソノ不可能ナル事ヲシロシメシカバ再海ニ泛ビテ志摩伊勢ノ海岸ヲ航行シ、恐ラクハ伊勢ノ祓川<sup>ハハヒ</sup>ノ河口ニ上陸シ、ソノ谿谷ニ沿ヒ高見山ヲ越エテ大和ニ入りタマヒケム。紀州ニテノ御上陸地ノ那智川ノ河口ナルベキ事ハ昭和八年五月和歌山縣ニテ縣史蹟調査委員ノ問ニ答ヘテ云ヒ又同月國史回顧會ニテノ談話中ニ述べ(同紀要第十五卷四四頁)伊勢ニテノ御上陸地ノ祓川一名稻木川<sup>イナギ</sup>ノ河口ナルベキ事ハ始メテ本月(昭和十一年四月三日)ノ放送中ニ述べキ。矛つきてハ日本紀天孫降臨章ニ平國時<sup>クニケシトキニケレ</sup>所杖廣矛トアルニ依レルナリ。しるべの神ハ即頭八咫鳥<sup>ヤタノトリ</sup>ナリ。第一章ニ此神鳥ヲニホハシテからすぞひとつ空をとぶト云ヒタレバ今ハソレヲ避ケタルナリ。なづむハ艱難辛苦ナリ。所謂開關ナリ。くさかの坂ハ生駒山ノ北ノ峠ニテ高見山ノ西北方ニ當レリ。兩山ノ直徑距離ハ十二三里ナラム。高見山ヲ越エ始メテ大和國ノ土ヲ踏ミテ西北雲際ニ生駒山ヲ望ミタマヒテ彼處ニテ苦戦シ給ヒシ事、皇兄彦

五瀬命<sup>イツセノミコト</sup>ガ矢創ヲ負ヒ終ニソレガ爲ニ薨ジタマヒシ事ナドヲ思出デタマヒケムト推測リ奉レルナリ。いづへはいづ方ナリ。萬葉集ニモ見エタリ

△「七五調デ崇高ナルモノヲ作ルハ頗困難デアアル事ヲ知リナガラ修業ノ爲ニカヤウナ物ヲ作ツテ見タノデアアルガドウデアラウ」ト外山ニ語ラレキ。第二章ニテヲ重ネラレタルハ故意ナリ

今様歌 第四集

緒言

第三集の緒言に云つた通り今様集の類は強ひて集めようと思はぬ。従つて梁塵秘抄や日本古典全集本の今様歌抄(歌謠集上古篇所收)も再讀んで見ようと思はぬ。然るに先頃古本市で今様集といふ一冊の薄様紙の大本が手に入つた。彼慈鎮の四季の什を始めて諸の古書に見えたる今様歌を拾ひ集めたもので、末に「うたひものの物に見えたるは」と書始めたる長文が添へてあり、奥に

右今様集相場長昭があつめものしたるとなんいへる 相場氏は椎谷シヒヤ(○越後刈羽郡)の堀

侯の家臣なり。天保のすゑに病にかかりて死す。和學を好む。經濟の道に長ぜし人なり

弘化三年七月書寫 華押

と記してある。又大阪の森繁夫君から自寫された今様詞と題せる瀟洒なる一冊本を贈られた。二川相近スゲチカ作の今様歌四十二篇を集め其末に慈鎮の四季歌といろは歌とを附したるもので、奥に

右空海のいろはなるもの其字句今様と符合す。然らば則空海の時既に今様有事知るべきのみ。因て茲に載す。且後人の正を俟と爾いふ 天保四年五月朔 山口秋桂識  
と書いてある

第三集の緒言に加藤櫻老編輯の古今今様集の卷頭に

若菜 菅公 そのふの梅の追かせに、我すむ山も春めきぬ、かど田の雪もむら消て、若なつむべく野はなりぬ

といふ歌を出せるを評して

これは無論假托である。決して菅公の作では無い

といつて置いた。然も誰が作といふ事は知らなかつたが森氏新贈の今様詞を見るに小異はあるが此歌が出て居る。即

山ざと そのふの梅のおひかせに、我山ざとも春めきぬ、かど田も雪のむらぎえて、わかなつむべくなりけり

とある。そこで更に彼しぎのはね搔を見るにやはり此歌が出て居る(辭は今様詞なると同一である)。されば此歌は二川相近の作である。相近は筑前藩士であるから太宰府天満宮に手向などしたのを輕卒なる人が菅公の作として櫻老に告げたのかも知れぬ。今一つ櫻老の今様集に相近の花ヨリアクルミヨシ野ノといふ歌を誤つて頼山陽の

作とせるを指摘したついでに

ハルノアケボノ見ワタセバとあるは見ワタサバといはではヤマ  
トゴコロニナリヌベシと打合はぬ。然るに「鳴のはねがき」には見セ  
タラバとある。見セタラバならばナリヌベシと時の格は相かなう  
て居るが手づつである。或は傳誦者が見ワタセバと直したのでは  
無いか。然もそれでは時格の相かなはぬに心づかなかつたのであ  
らう

といふ意味の事を云つておいた。然るに森氏所贈の今様詞を見るに  
まさにミワタセバとある。今様詞と「鳴のはね搔」とどちらがさきに成  
稿したか知らぬが作者自身が一を他に改めたのである。然も一は粗  
笨であり一は語格が外れて居る事前に云へる如くである

余が青年の時に暗んじてゐた今様の中に

嶺のあらしか松かせか、たづぬる人の琴のねか、駒をひかへてきく  
ほどに、つまおとしるき想夫憐

といふのがあるが越天樂填詞下卷今様歌雜襍(?)に據るとこれも相  
近の作である

相近の作にはユフベノ雨ノオモカゲ今コソ來ナケハツカリなどの  
如く第四節を七四(又は八四)に調べなしたものが少からずある。元來  
相近は琴歌として今様を作つたので、琴歌ならば絃聲を以て肉聲を  
補ふ事が出来るが余の今様曲の如く素謠にするには即無絃で謠ふ  
には七四では謠はれぬ

或人から越天樂填詞といふ書名の義を問はれたからついでに云は

う。越天樂は雅樂の曲名であるが七五調であるから彼書名には七五調といふ代に越天樂と云つたのである。近藤芳樹の古風三體考に穂井田忠友の跋があるが其中に

大よそ歌の姿いにしへは言の數を五七五七と運べるが常なるを今、京に移りて後は強にさだめ更アラタめもせられけむやうに七五七五とつづくるならひに成たりとは誰もみな思ひも云ひもするなれど其七五と續くる癖の付たるいはれはいかにと考へたるはいまだきかず。おもふにいにしへ唐國人の渡りそめてより目なれぬ色には迷ひやすく上中下すべてかの國ぶりを珍らしみゆかしみもてはやされしから繼々に參り渡りて居付たるも多くまたはその唐人どものここにて産せたる子うま子も御國人ならにいひと云ひなしと爲す事親ならひの唐わざさし交り特に音樂などは嚴めしき笙箏篳篥をしも先にたててふるまふめれば世人みな夫にながれて年月をへつつ新京建らるるさかひに及びては公家オホヤケにもいと唐ぶりを好み給ひて其ふりならひにと歟幾度ともなく遣唐使を下されしころしも若き人々の笛ひとつならさ

んも入立つ始の越天樂にしらべなづみて何の唱歌も此一ふしにはさそはれやすくアカガリフムナシリナル子、吾モ目ハアリ先ナル子（○神樂歌の早歌）といふあやしき調の出きたれるは即中昔の朗詠今様などのさきがけにてよの常の三十一言も初の五言はいたづら物の如くすべては七五をむねとするから長歌に至りては特に姿を失ひて昔に似たる佛だになくなり果し也。五七の調の高く貴きと七五七五の卑けなるとは唱へくらべて味ひ知るべきなりけり。と語申しかは是は此草子のよき補ひなり。言のままを此端に書付て。とこはるるにやがて筆を操トて其大むねを録す（○以下略）

と云つて居る。又支那の填詞は我邦のハウタの如きもので、一名を詩餘といふ。種々の圖譜があつてそれを按じて詞を填むるのであるから填詞といひ又詞ハ詩ノ餘ナリといふ意で詩餘といふのである。然るに邦語には平仄が無く又韻が無い。又今様歌は七五句四節で長短句がありはせぬ。されば今様歌を填詞とは稱せられぬ。之を填詞とい

へるは一知半解の徒の好事に過ぎぬ。填詞の事は竹田全集なる填詞  
 圖譜の附録なる填詞國字總論を見て心得るがよい。余もよくは知ら  
 ぬ  
 今回は何を云はうかと思つて居たが思の外に長談義となつた。第四  
 集は齋藤周吉君等大阪の門人有志の負擔出版で歌は四月九日以後  
 の作である

昭和十一年六月十六日

南天莊主人

目次

水無瀬宮 二章	大阪府三島郡島本村	一八一
串本橋杙岩	和歌山縣西牟婁郡	一八三
笠形山 二章	兵庫縣神崎郡瀬加村	一八四
猪篠 三章	同 大山村	一八五
志染窟 二章	美囊郡志染村	一八六
安志姫神社	同 穴栗郡安師村三森	一八八
伊和神社	同 神戸村	一九〇
楠木正行首塚 三章	大阪府中河内郡繩手村六萬寺	一九二
安祥寺	京都府東山區山科御陵	一九六
又		一九九

疏水くだり……………二〇〇

又……………二〇一

又……………二〇三

又……………二〇四

且椋神社……………京都府久世郡大久保村……………二〇五

水度神社……………同 寺田村……………二〇六

飯岡……………同 綴喜郡草内村……………二〇七

宇治川……………二〇八

鶯……………二〇九

櫻花……………二一一

櫻草……………二一二

夏鴉……………二一三

科斗……………二一四

石榴花……………二一五

初夏田……………二一六

孤兒……………二一七

鼠……………二一八

眺望……………二一九

又……………二二〇

五本松……………二二一

以上三十篇三十七章



水無瀬宮

みなせの宮の春の夜に、御うたあはせをしたまふと、ここに來か  
よふ右馬頭、あらば召せとや仰<sup>おほ</sup>すらむ 其一  
みなせの宮の秋の夜に、波のとは音をきこしつつ、にひ島守のそ  
のかみをおぼしいづらむつくづくと 其二

○官幣中社水無瀬宮ハ攝津國ノ東端ナル三島郡島本村大字廣瀬ニアリ。後鳥羽天皇ト土御  
門・順徳ニ天皇ト御父子三柱ヲイツキ奉レリ。三天皇共ニ歌ヲ好ミタマヒキ。中ニモ御父  
天皇ハ歌ニ長ケタマヒキ。右馬頭ハ在原業平ナリ。伊勢物語ニ

昔惟喬のみこと申御子おはしましけり。山さきのあなたにみなせといふ所に宮ありけり。  
年ごとの櫻の花ざかりにはその宮へなんおはしましける。其時右の馬のかみなりける人

をつねにゐておはしましけり

トアリ。サレバ時代ハ無論不同ナレド業平ハ屢水無瀬ニ來リシナリ

桂川ノ淀川ニ合流セル處ハ水無瀬宮ノ近キ東方ニ當レリ。波のほとハソノ瀬音ナリ。と

ほとハ萬葉集卷四ニ梓弓つまびく夜音ヨトの遠音にもトアリ。後鳥羽天皇ノ隱岐島ニマシマシ

シ程ノ御製ニ

われこそはにひ島守よおきの海のあらし波風こころしてふけ

トイフイト畏多キガアリ。島守ハ防人サキモノナリ。世人往々誤解セリ

### 串本橋杙岩

おほ人あまた大島に、わたらむとしてたゆたひて、しほの引かむ  
をまつ程に、さながら岩とぞなりにけむ

○橋杙岩ハ紀伊國東牟婁郡ト西牟婁郡トノ界、串本ノ東北ニ在リ。直立セル巨岩大小數十、  
一列ヲ成シ海岸ヨリ起リテ前面ナル大島ニ向ハムトスルモノノ如シ。ソノ狀橋杙ニ似タレ  
バトテカク名ヅケタルナルガ其比擬イマダ妙ナラズ。トモカクモ天下ノ奇觀ナリ。第四節  
ハ正シクハ岩にぞト云フベケレドまつ程に・なりにけむトにノ音カサナレバ、ソヲ避ケテ  
岩とぞト云ヘルナリ。例ハアリ。第二節聊ウタヒニクシ。わたらむノむヲ明ニむト發音ス  
ベシ。わたりなむとてト改メムハネガハシカラズ  
△くひハ杙又ハ杙ト書クベシ。杭ハ別字ナリ。さながらハそツくりそのままナリ(△ハ補  
註、以下準之)

笠形山

遠くのみ見しかさがたを、けふこそちかく仰がめと、やぶれ車を  
はしらせて、せか谷ふかく入りこしを 其一  
前なる山にさへられて、峰はここより見えずてふ、さてさと人の  
教ふらく、四五里はなれて見るべしと 其二

○笠形山ハ播磨國神崎郡ノ名山ナリ。俚俗笠形山ト云ハズシテ單ニ笠形ト云フ。昭和五年  
五月四日神崎郡ノ北部ヲ巡見セムト欲シテマヅ瀬加谷ニ入り寺家シヅカ即笠形山下ニ到ル。里人  
云ハク。正面ニ見ユル木ノ茂レルガ官林ニテオ宮（○岩戸神社）ノアル山、ソノ左ニヤヤ  
高キガ笠ノマハリ、連峰中最高キ杉ノマハリハ後ニカクレテココヨリハ見エズト

猪イノ 篠シノ

つつじもおひぬくさ山の、ところどころに岩見えて、はなてる牛  
の十ばかり、かなたこなたに草をはむ 其一  
緑のなかにむらむらと、濃きが見ゆるを指ざして、あれは何ぞと  
たづぬれば、みなしろゆりの苗といふ 其二  
其時ならぬがくちをしや、又こむ事はかたからむ、よしやさらば  
と目ふさげば、山はたちまち花ざかり 其三

○大山村ノ猪篠ハ播磨國神崎郡ノ北邊ニテ播磨但馬ノ國界ニ近シ。邊鄙ナレバ人多クハ知  
ラズ

志染窟

岩屋みむとぞ我はこし、金水見むとやのぼりくる、村のをとめのはれ著きて、ふたりみたりの友をゐて 其一  
見るものもなき鄙なれば、山にあそばむ外やなき、あたらしひと日の休にも、あたらしひと世のさかりにも 其二

○所謂志染窟ハ播磨國美藝郡志染村大字窟屋宇池野ノ窟屋山ノ東麓ニ在リ。此處ニ遊ビシハ昭和六年五月三日ナリ。三木町ノ手前ニテ東ニ向ヒ志染川ヲ渡リテナホ東走シ小學校ノ手前ニテ志染川ノ假橋ヲ渡リ田中ノ路ヲ東南ニ行キテ窟ニ到ル。窟ハ谷間ニアリテ其中ハ一面ニ水タマリテ黄色ノ粉ノ如キモノ浮ベリ。所謂池野ノ金水ナリ。實ハ一種ノ下等植物ノ蕃殖セルナリト云フ。コノ粉ノ如キモノノ浮ビソムルハ菜花ノサク比ニテ日ヲ追ヒテ益

滋ク終ニ一面ニ金色ヲ呈スル由ナルガ余ノ到リシ時ハソノ盛ヨリ後ナリト云フ。サテ夏ニハ銅色、秋ニハ銀色、冬ニハ鐵色トナル例ニテ就中秋ハ又サル方ニ美シケレバ特ニ名ヅケテ銀水トイフト云フ。當日村ノ兒女ノ少カラズ見エシハ金水ヲ見ガテラノ山遊ナラム。怪シゲナル駄菓子ヲ賣ル店モ見エキ。窟ノ口ハ間口七八間ニテ東ニ向ヘルガ前ニ石ノ玉垣ヲ設ケ其中央垣ノ内ニ一小祠ヲ造リ、向ヒテ右ニ史蹟志染岩窟、昭和六年三月建設兵庫縣ト刻メル碑ヲ建テタリ。播磨風土記ニハ於奚袁奚ノ二皇子（後ノ仁賢顯宗兩天皇）シジミノ石室ニ隠レタマヒキト云ヒ日本紀ニハ二皇子ノ忠臣日下部使主シジミノ石室ニ入りテ縊レ死ニキト云ヘルガ窟ノ狀ヲ見ルニ天井ト水面トノ間極メテ低ク、中央ナドハ一尺以下ト見ユ。シバシナリトモ人ノ住ムベキ處ニアラネバ風土記ニ二皇子ノ潜匿ノ事ヲ云ヘルハ訛傳ナラズバ別ノ窟ナラム。日下部使主ノ入りテ縊レシモ恐ラクハ此窟ニハアラシ。此窟ノ在ルハ谷間ノ切岸ノ下ニテ其切岸ハ土ヨリ成リテ其中ニアマタノ小サキ丸石ヲ含メリ。其狀赤豆餅ノ如シ。或ハ谷川ノ底ノ埋モレテ成レルニハアラザルカ